

Zola chroniqueur politique (下)

——政治記者ゾラ——

尾 崎 和 郎

3. 議会通信

『前進する共和国 *La République en marche*』の標題のもとにまとめられているゾラの議会通信は、《ボルドー通信 *Lettres de Bordeaux*》(1871年2月13日—1871年3月15日)と、《ベルサイユ通信 *Lettres de Versailles I—VIII*》(1871年3月22日—1872年8月5日)のふたつにわけられる¹⁾。前者はボルドーにおいて、そして、後者はベルサイユにおいて議会がひらかれていたとき、ゾラが *La Cloche* 紙に掲載した国民議会 *Assemblée nationale* に関する記事である。

国会は1871年2月8日の総選挙がおわるとすぐに、ボルドー市の大劇場に召集されるが、そのもっとも重要な議題はプロシアとの講和条約である。それゆえ、《ボルドー通信》の主要な内容は、平和条約をめぐる議会の動きである。2月26日、仏独講和予備条約の調印によって、ボルドー議会がその大役をはたすと、国会はボルドーから、パリ近郊のベルサイユに移る。そして、その直後にパリにコミューンが成立する。一般にパリ・コミューンと呼ばれる《1871年のコミューン *La Commune de 1871*》である。当然のことながら、パリのこの〈暴動〉が《ベルサイユ通信》のもっとも重要な部分を構成することになる。

「わたしは一介の書記にすぎない。わたしにできるのは、時々刻刻生起する出来事の報告書を作成することのみである²⁾。」

ゾラはこのように書いて、彼の通信記事を冷静かつ正確な国会報告とする意図を表明しているが、実際にはこの意図とかけはなれて、彼自身の希望や期待やイデオロギーをその議会報告に注ぎこんだ。それゆえ、

彼の議会通信は、議会の動きを公平無私に、客観的に伝えたものではない。ましてや、ひややかな、かたぐるしい議事録ではなかった。『ルーゴン・マッカール双書』がタテマエとしては、第二帝政に関する客観的な〈口述調書〉であるにもかかわらず、実際には、第二帝政にたいする激烈な告発であったように、この議会通信もまた中立無色の通信記事ではなくて、議会の多数派である右翼、hobereaux（田舎紳士）にたいする激しい攻撃の文書であった。『ルーゴン・マッカール双書』が作者の自然主義思想や社会告発によって強固に裏打ちされて活気づくように、この議会報告も majorité rurale（田舎地主の多数派）にたいする記者ゾラの敵意や憎悪によって、躍動する生気を吹きこまれているのである。

ゾラの ruraux（田舎地主）にたいする憎しみは強烈で、彼はかれらを臆面もなく罵倒し、嘲弄し、揶揄する。ゾラの筆先を通過すると、かれらは公衆に笑いを提供する滑稽な道化師と化す。しかし、*La Cloche* 紙上で物笑いのタネになったからといって、かれらは決して一笑に付してしまうほど弱体であったわけではない。majorité rurale という呼称がしめすように、かれら honnêtes gens は圧倒的な一大勢力である。ゾラがかれらにたいしておこなう戯画化の激烈さは、いわば、かれらの攻撃と圧力の激烈さの裏返しにはかならない。この右翼勢力をたたきのめそうとするゾラの思いは激しく、ゾラのこの激しい思いに支えられた右翼代議士のカリカチュールが、この議会通信の最大の興味である。そして、ゾラが右翼とこのような形で対決するのは、もっぱら平和条約と〈騒乱〉に関してであるが、ゾラはこのふたつの問題をどのように考えていたのであろうか。この問題に関するゾラの思想、というよりはゾラの考えをさぐるのが、拙稿の主要な目的である。majorité rurale については、稿をあらためて論ずるつもりである。

〔注〕

- 1) Voir Emile Zola, *Œuvres complètes*, Cercle du livre précieux, 1966-1970, t. XIII.

Cf. *L'Atelier de Zola, textes de journaux 1865-1870*, recueillis et présentés par Martin Kanes, Droz, 1963, p. 20.

Kanes によると 1956 年に Jacques Kayser がゾラの記事をまとめて、*La République en marche. Chroniques parlementaires 13 février 1871-16 septembre 1871* として上梓した。

《ボルドー通信》はほとんど連日書かれているが、《ベルサイユ通信》の方はパリ・コミュン時の発行停止、議会の休会などによって休載のことが多い。

2) *(Euvres complètes, t. XIII, p. 387 (4 mars 1871)).*

1. 平和条約

「プロシアと交渉することのみを委任されたこの議会」とゾラが書いているように¹⁾、ボルドー議会において、なによりも重要な議題はプロシアとの講和条約である。2月12日に召集された国民議会は、2月26日の講和予備条約の調印にむけて全力を集中する。

開戦当時、「野蛮なドイツ」にたいして「共和国フランス」をまもるために、「市民兵」として戦うことを称揚したゾラにとって、休戦と、それにつづく平和条約は大きな屈辱であった。彼は和平条約に反対であり、いわゆる徹底抗戦 (*la guerre à outrance*) の立場にたっていた。ジョルジュ・サンドが「プロシア人以上に犯罪的である」といって非難した、あのレジスタンスのひとりである²⁾。しかし、大勢がレジスタンスに背を向け、議会内の多数派と政府とがドイツへの全面降伏にかたむいていることはゾラの目にもあきらかであった。そして、ゴンクールがその『日記』のなかに書いているように、〈降伏 *capitulation*〉であるにもかかわらず、「支配者の老獪さ」で、それを〈協約 *convention*〉にすりかえていることもまた彼は理解していた³⁾。ゾラの目にも、*la guerre à outrance* は不可能にみえ、講和のみが賢明で、現実的な方法とみえた。

もともと1870年戦争の敗北は、右翼や将軍や保守主義者たちによって作りだされたものである。「フランスは勝てる」といったエンゲルスをはじめ、多くの史家が指摘するように、フランスはプロシアと戦うのに十分な軍事力を保有していた⁴⁾。しかし、〈敗北の仕掛人 *artisans de la défaite*〉たちは、*la guerre à outrance* を主張する *Bellevillois* を何よりもおそれ、パリの〈賤民〉に勝利を与えることよりも、プロシアに勝利を与えることをえらんだ。*Bellevillois* の勝利は、そのまま、〈*les honnêtes gens*〉の社会的、経済的基盤の瓦解である⁵⁾。「*les honnêtes gens* にとって重要なのは、ドイツの勝利がかれらに確保してくれるところの特権の永続のみである⁶⁾。」

おそらくゾラはこのような事情を民衆とおなじレベルで、おなじ程度

だけ、うすうす気づいているにすぎず、明確には理解していなかったにちがいない。「外国のサーベルのもとで平和を懇願し、それがえられないのではないかと戦々恐々として、ひざまずいているフランス」と書いているように⁷⁾、彼はフランスが圧倒的なプロシア軍の力のまゝに敗北を喫したのだと信じている。それゆえ、彼は抗戦を主張しながらも、抗戦はさらに大きな敗北をもたらすかもしれないという不安をいだいている。将軍たちが〈敗北の仕掛人〉であることに気づいていれば、彼は声を大にして抗戦を主張することができたはずである。表面的な戦況しか理解しえなかったがゆえに、彼の抗戦の主張は、弱々しいものにとどまらざるをえなかったのである。

しかし、抗戦の主張が弱々しいとはいえ、ゾラの徹底抗戦の気持ちに変わりはない。彼は議場内に抗戦的雰囲気のもりあがるのをまちのぞみ、つぎのように書いている。

「議会には一種の愛国的な目ざめがみられ、わたしは非常にうれしい。数人の将軍が戦争を成功裡につづけることができると宣言し、それを証明したので、戦争の可能な必然性がより強い確信をもってむかえられた⁸⁾。」

議会内の抗戦の急先鋒としてゾラの注目をひいたのは Gambetta である。「ガンベッタは社会主義をおそれ、ブランキを嫌悪し」⁹⁾、〈田舎ブルジョワジーの化身〉、〈オボルチュニスト〉といわれて¹⁰⁾、その政治思想や行動は一般にあまり高く評価されていないが、ゾラは〈新左翼のリーダー〉として彼に大きな信頼をよせ、「徹底抗戦の彼の方針」や「愛国的姿勢」を支持し、かつ、称賛するのである¹¹⁾。

一方、ガンベッタとおなじようにゾラが常日頃信頼をよせていた Edgard Quinet や Victor Hugo や Louis Blanc もまた抗戦派ではあったが、彼の期待するほど声を大にして抗戦を叫ばなかったため、彼はなかば裏切られ、皮肉をこめてかれらの態度を報告している。

「エドガール・キネ氏はその大いなる才能にもかかわらず、われわれの権利と、ドイツの封建的要求との講義をしたにすぎない。ビクトル・ユゴー氏は文学的一ページとして残る、美しい、みごとな講

演をした。しかし、彼は結論をださなかった。(……)ルイ・ブラン氏のみが問題を明確に要約した。(……)しかし無用の美辞麗句¹²⁾。」

このように議会内の抗戦派の意気がゾラの期待通りにもりあがらないまま、3月1日、講和条約が批准される。そして、〈les honnêtes gens〉の安泰の代償として要求されるのは、莫大な賠償金とアルザス、ローレーヌの割譲である。「一世紀もの間、プロシアへの債務者となり(……)収入の一部を利子にとられ、そして、ドイツがわが国の生産物をやすく手にいれるとすれば、われわれはどうなるのであろうか」と、ゾラは50億フランにのぼるこの「莫大な賠償金におそれをいただいている」¹³⁾。そして、彼はこのような苛酷な賠償金や不平等な通商条件が緩和されるのであれば、国土の一部を放棄してもよいとさえ考えるのであるが、この考えは瞬時の気まぐれな迷いから生まれたものであり、国土の割譲は絶対にはゆるしてはならないというのが彼の真意である。

「数十億という金額など問題ではなかった。われわれは一つの村たりとも譲りわたさないために、金額を二倍にでも、三倍にでもしたであろう。金額のことを語ろうとした弁士はひとりもいなかった。ひとびとは祖国のことを語ったのだ」というゾラの言葉は、割譲に関する彼の関心と屈辱の深さを物語るものである¹⁴⁾。

フランスは講和条約にもとづいて、Belfort をのぞく Alsace, Metz, および, Lorraine の一部をプロシアに割譲することになるが、ゾラはそれが確定する以前から、さまざまな噂や情報をもとにして、大きな不安をいだきながら、この問題に関心をよせていた。「プロシアが Nice と Savoie を中立化」するというニュースや、ビスマルクがフランスをヨーロッパ大陸の他の部分から分離しようとしているのだという噂など、ほとんど根拠のない情報に気をもんでいたということは¹⁵⁾、なによりも彼の関心が割譲にむけられ、割譲によって彼のなかにひきおこされる精神的打撃の深さをしめすものである。

そして、この割譲に反対するものがあれば、たとえそれが、日頃彼の嫌悪し、憎悪する右翼でもかまわなかった。割譲に強硬に反対し、遂に議員をやめるにいたる Haut-Rhin 選出の右翼の代議士 Emile Keller の態度を、とりわけ彼は高く評価する¹⁶⁾。そして、L. Blanc や Hugo や Quinet など、徹底抗戦に関してゾラを十分に満足させえなかった、

いわゆる bourgeois démocrates も、割譲問題に関しては彼を満足させる。とりわけ彼は Hugo の態度と言葉とに深い感動をおぼえるのである¹⁷⁾。

Chastenet によれば、仏独予備条約批准の翌日の3月2日、E. Quinet や L. Blanc は「戦争の再開を要求している」¹⁸⁾。ゾラもまたこれに同調している。しかし、これらの代議士もゾラも、Thiers を首班とする保守的共和政府と majorité rurale とにおされて、la guerre à outrance を主張しつつけながらも、心のなかでは和平を受諾する方向にかたむいている。もはや一般的な情勢は降伏以外にはない。戦争の再開が可能であるとすれば、なにか異常な事件によるほかはない。たとえば、休戦交渉の推進者、チエールとビスマルクの突然の死などである。条約批准前のことではあるが、ゾラは「チエール氏とビスマルク氏がサン・ジェルマンの森を四輪馬車にのってすすんでいたとき、馬があばれて死んだ」という流言を記事としてとりあげている¹⁹⁾。このような流言飛語を信ずるなど「きちがいざた」であり、「狂ってしまった想像力がどこまで異常になるかをしめすものだ」と彼は書いているが、このような荒唐無稽な噂を信じようとしていたのは、ほかならぬゾラ自身である。そして、このような噂を信じようとしていたということは、正常な形ではもはや la guerre à outrance はのぞめないほど状況が平和にかたむいているなかで、いかにゾラが戦争の再開をまちのぞんでいたかをしめすものである。そして、こうした異常な想像によってしか戦争の再開が期待できないとすれば、もはや敗戦をうけいれる以外にはなかったが、それには大義名分ないし言い訳が必要であった。それが左翼のいう〈原則〉である。すなわち、ゾラも、ゾラのいう extrême-gauche も、決して戦争をのぞんでいるわけではなくて、ただ、〈スジを通してているのだ〉というわけである。

「左翼は原則に賛成であり、チエール氏は事実賛成である。彼の言葉はすべて、われわれのうえに重くのしかかる、おそるべき宿命を証明することのみを目標とした。破壊されることをのぞまないならば、講和条約をむすぼうではないか。(……)この賢明な——あまりに賢明な政策が、あきらかに、唯一の可能な政策である。(……)わたしは平和を弁護すると同時に条約に反対したのであ

る²⁰⁾。」

この言葉はあきらかに Thiers 一派への追従と <les honnêtes gens> への屈服をしめすものであるが、ゾラはこのような défaitisme におちいったことを恥じながらも自己弁護をこころみて、L. Blanc や Hugo もまた和平に賛成であろうというつぎのような推測をつけくわえている²¹⁾。

「他方、ルイ・ブラン氏やビクトル・ユゴー氏があえて語る 勇気があったならば（……）戦争はもはやわが国の滅亡しかもたらしえないと告白したであろう。」

この言葉がしめすように、L. Blanc や Hugo が和平に賛成ならば、彼も安心して和平を受諾することができるのである。それはともかくとして、こうして敗北と条約を無理やりにのみこんだ後、ゾラは〈いとしきフランス〉の死を悲しみ、悲痛な調子で葬送の曲をかなでることになる。講和条約に関する法案が議会で提案された2月28日、彼はつぎのように書いている²²⁾。

「わたしは大きな悲哀を感じながらこのノートを送りつづける。（……）わたしはこのおそるべき瞬間を生涯わすれないであろう。（……）議場全体が苦痛のために茫然としていた。（……）法案は死の沈黙のなかで読了された。（……）叫び声ひとつあがらない。50億という数字や、メッスやストラスブールの名がすすりなきのように伝わった。（……）その夜、ボルドーは喪服をつけた。」

翌3月1日、条約が批准された日にも、彼はつぎのように書いている²³⁾。

「心がひきさかれる気持ちだ。（……）もっとも強い意志さえも屈服させる、あの不幸の風が議場のうえを吹きすぎるのを、議会全体が感じたのである。」

このようにゾラは「フランス史のなかに永遠に喪服の日として記録される」日のことを、深い悲しみをこめて書いているのであるが²⁴⁾、彼は決して悲しみに沈み、沈痛な表情で敗北の歌をうたっているのみではなかった。いかにしてこの屈辱と悲哀から脱し、また、いかにして精神的な打撃から立ちなおるかを模索していたのである。「このような陰うつな主題について、ことこまかに述べたとしても、何の役にたつだろうか」と書いているように²⁵⁾、なげきの歌からはなにも生まれてこないことを彼は認識し、そして、「講和条約は成立したのだ」²⁶⁾、もはや la guerre à outrance はありえないのだということを納得する必要があるのである。

講和条約が546票対107票で批准され、和平派が圧倒的勝利をおさめたということ、そして、結局は右翼とプロシアからダブル・パンチをくらったのだということ、この事実を率直にうけとめることが彼には必要であった。

「フランスは手足をもぎとられ」、「屍衣をつけ」、「硬直して横たわっているのである」²⁷⁾。この死者は、もはや、なげきかなしむ対象ではない。「運びさり、埋葬してしまわ」なければならず、そして、それについては「二度と口にしてはならないのである」²⁸⁾。その理由をゾラはつぎのように述べている²⁹⁾。

「手足を切断したひとは、うしなったばかりの手足をみせられると気絶するという。フランスはおそろしい手術に同意したのだから、自分から切りはなされた肉体をもう二度とみないという勇気を、いまこそもたなければならないのである。」

以上のゾラの言葉からすれば、彼はすべてを忘れさり、すべてを水にながす方向にむかっているようにみえる。あるいはすくなくとも、必要上そうしなければならないのであると主張しているようにみえる。しかし、彼は敗北の屈辱をわすれ、恨みをすてさったわけではない。ドイツにたいする彼の憎悪と敵意は、よりいっそう熾烈になるばかりである。彼はプロシアを嘲弄、罵倒し³⁰⁾、かつ報復を誓うのである。

「死者がいなくなり、葬儀人夫のプロシア人が姿をけしたとき、

われわれは息をつくだろう。そのとき、われわれは涙をふいて、生命と復活と報復とへの勇気をもつだろう³¹⁾。」

「組織しなおしたら、われわれは報復をかんがえるだろう。(……)復讐のひそやかな夢のなかで、みずからをなぐさめなければならない³²⁾。」

ゾラはこのように復讐をちかっているのであるが、復讐の誓いのみが彼の心を軽くし、やわらげ、悲しみをいやすのである。そして、報復の夢をはぐくむには、敗北の屈辱をわすれさることなく、つねにその屈辱によって敵意をかきたてる必要があるが、しかし、同時にまた、敗北のなまなましい屈辱感になやまされてもならない。屈辱感や悲しみや憎悪があまりに強いとき、報復の勇気も萎縮してしまうからである。報復の勇気をかきたてるには、これらの感情が適度でなければならない。〈死者〉を早急に埋葬してしまわなければならないとゾラがいうのは、そのためなのである。

また、現に眼前に戦勝者がいては、雄大な復讐戦の構想も萎縮してしまう。たとえドイツが撤退しても、ドイツがおしつけた〈苦杯〉と〈泥の山〉はかわらないが³³⁾、とにかくドイツの姿がみえなければ、〈われわれは息をつく〉ことが可能となり、またドイツ兵を眼前にしているときの過度の憎しみををはなれて、余裕をもって報復戦の想をねることができる。彼がドイツの撤退をのぞむのはそのためであるが、こうした余裕のある形で態勢を完全にととのえたとき、実際に、ドイツ壊滅のための戦闘を開始しようというわけである。

しかし、ゾラのこの復讐戦の夢も、条約批准直後のパリ・コミューンの波にのみこまれ、プロシアへの敵意にかかわって、右翼への敵意が彼を大きくとらえる。彼はほとんどプロシアについて触れず、コミューン成立以後ドイツへの憎悪をしめすのは、賠償金の頭金10億フランが支払われた時の記事と、《Les batailles de la plume》という11月の記事との二つの記事だけである³⁴⁾。なるほど、とりわけ後者の記事には、つぎのように、プロシアにたいするはげしい敵意が露骨に表現されている。

「プロシア人はわれわれに血をあびせかけたのだから、こんどはわ

れわれがかれらにむかって嘲笑をあげせかけ、かれらを屈辱のなかにしずめるだろう。(……) くりかえし毎日いうのだが、フランスとドイツはこううななく激しく憎みあっている。これはわが国の健康にはすばらしい。(……) あれほどの虐殺がありながら、苦悩と憤怒をうたう祖国の叫び声は、ひとつたりともあがらないのか！」

このように《Les batailles de la plume》のなかでは、はげしい、熱っぽい口調で復讐を訴えかけ、いわば、読者に復讐をけしかけている。言葉の激烈さからのみ判断すれば、彼のなかには、おとろえることなく復讐心が生きつづけているようにみえる。しかし、この記事は〈ペンの戦い〉をすすめているのであって、軍事力による本当の戦争をすすめているのではない。しかも、一見その表現は激しい憎悪に支えられているようにみえるが、敗戦直後の記事にみられるような重苦しい報復の誓いとはことなり、くやしきや恨みなどはほとんど感じられない。ここには、むしろ、ドイツ人には「フランスの特性である知性のあの鋭敏さ」が欠如しているというなど、ドイツにたいする余裕と優越感が見出される。たとえ過去に武力で負けたとしても、知性においては常に優位をたもっているのだという、自信と自負と誇りがみられ、このような優越感を保持しているゾラのなかに、数カ月前の深刻な報復への欲求が持続するはずはなかった。そのときの恨みが強烈な形で残っていれば、彼はたえずそれを語りつづけたはずである。死者のことを「二度と口にしないがよい」と書いたことを、みずから忠実にまもったとも考えられるが、おそらく死者のことを口にせず、死者に背をむけている間に、彼はいつのまにか右翼の方により多くの関心をひかれ、彼のドイツ憎悪は次第にうすれていったのである。

実際、この記事にみられる激しい言葉にしても、読者の復讐心をかきたてるためというよりも、もっぱら、詩人を非難、攻撃するために用いられている。おそらく、この記事の目的は詩人批判であり、その口実としてドイツ報復が使われているにすぎないのである。ゾラの後輩モーパッサンは後々までも敗戦の屈辱と恨みをわすれなかった。彼は戦後10年を経てから書いた処女作『脂肪のかたまり』において、1870—1871年の戦争を主題にし、それ以後も10編足らずの戦争物を書き、死ぬまぎわにもドイツ憎悪の言葉をもらした。このようなモーパッサンと比較すると

き、ゾラは敗戦時の短期間をのぞいて、實際上、この敗戦にそれほど強い屈辱感をいだかなかったのではないかとさえ思われる。多分それは、ドイツは真の敵ではなく、真の敵は右翼であり、honnêtes gensであることを彼が直観的に認識したからである。〈賤民〉の敵である ruraux にたいする戦いこそ、展開すべき真に重要な戦いであり、それにくらべれば国家間の戦争はたわいないものであり、patriotisme にいたずらにふりまわされてはならないと、彼は自覚するのである。いいかえれば、彼はより高い視点にたって、1870—1871年戦争を考えるにいたったのである。

〔注〕

- 1) *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 381 (28 février 1871).
- 2) Cf. Henri Guillemin, *Les Origines de la Commune IV, L'Avènement de M. Thiers et Réflexions sur la Commune*, Gallimard, 1971, p. 56.
- 3) Edmond et Jules de Goncourt, *Journal, mémoires de la vie littéraire*, tome II (1864-1878), p. 733 (30 janvier 1871).
- 4) *La Commune de 1871*, sous la direction de Jean Bruhat, Jean Dautry et Emile Tersen avec la collaboration de Pierre Angrand, Jean Bouvier, Maurice Choury, Henri Dubief, Jeanne Gaillard et Claude Perrot, Deuxième édition revue et complétée, Editions Sociales, 1970, p. 72.

F. Engels écrivait le 21 janvier que si les Français concentrent leurs masses sur un point, "ils peuvent encore vaincre—si sombres que les choses aient l'air d'être pour eux aujourd'hui". (*Notes sur la guerre*, Editions Costes, 1947, pp. 277-278.)

- 5) H. Guillemin, *L'Avènement de M. Thiers, ouv. cité*, pp. 91-93, 113 et 307.

Guillemin は歴史家 Albert Sorel のつぎの言葉を引用している。

Paris 〈n'a pas été pris, mais vendu〉, (...) 〈ce ne sont pas seulement les Bellevillois qui le disent et le croient, mais l'ensemble de la bourgeoisie〉.

大仏次郎『パリ燃ゆ』(朝日新聞社, 1971年, 大仏次郎ノンフィクション全集 3~5) も、〈敗北の仕掛人〉による敗戦説にもとづいて書かれている。

- 6) *Ibid.*, p. 93.
- 7) *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 391.

- 8) *Ibid.*, p. 379 (25 février 1871).
- 9) *La Capitulation (1871), Les Origines de la Commune III*, Gallimard, 1960, p. 14.
- 10) *La Commune de 1871, ouv. cité*, pp. 86 et 92.
- 11) *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 373 (21 février 1871).
- 12) *Ibid.*, pp. 391-392 (1^{er} mars 1871).
- 13) *Ibid.*, p. 375 (22 février 1871).
- 14) *Ibid.*, p. 395 (2 mars 1871).
- 15) *Ibid.*, p. 375 (22 février 1871).
- 16) *Ibid.*, pp. 362 et 380 (17 et 25 février 1871).
- 17) *Ibid.*, pp. 396-397 (2 mars 1871).
- 18) Jacques Chastenet, *Histoire de la III^e République*, t. I (*Naissance et Jeunesse*), Hachette, 1952, p. 59.
- 19) *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 384 (26 février 1871).
- 20) *Œuvres complètes*, t. XIII, pp. 392 et 394 (1^{er} et 2 mars 1871).
- 21) *Ibid.*, p. 394 (2 mars 1871).
- 22) *Ibid.*, pp. 389-390.

この日ゾラは 10h, 11h, 12h, 2h, 3h et demie, 6h というように、数回にわけて議場の様子と彼の印象を書きとめている。

Guillemin はこの記事のなかの〈la lecture du traité s'est achevée dans un silence de mort〉というゾラの言葉を、*L'Avènement de M. Thiers et Réflexions sur la Commune, ouv. cité* (p. 98) で引用している。

- 23) *Ibid.*, p. 392.
- 24) *Ibid.*, p. 387.
- 25) *Ibid.*, p. 393.
- 26) *Ibid.*, p. 393.
- 27) *Ibid.*, pp. 381, 390 et 393.
- 28) *Ibid.*, p. 381.
- 29) *Ibid.*, p. 393.
- 30) 「葬儀人夫のプロシア人」、「野蛮で掠奪的なプロシア」、「ドイツの食人鬼」ビスマルク、「盗人」プロシアなどと嘲罵している。(*Ibid.*, pp. 381, 394, 401 et 515.)

なお、ゾラは開戦時にもフランスを気品のある貴婦人にたとえ、プロシア

を「無作法女」「はたご屋の太っちょ娘」「北国のおしゃべり女」「駄馬」などにたとえて嘲笑している。(Ibid., pp. 307-308.)

31) Ibid., p. 381 (25 février 1871).

32) Ibid., p. 392 (1^{er} mars 1871).

33) Ibid., p. 385 (26 février 1871).

34) Ibid., pp. 595 et 707-709 (3 août et 15 novembre 1871).

2. La Commune de 1871

「要するに平和条約をむすぶためにえらばれたこの議会は、いま、その任務をはたしたところである」と J. Chastenet が書いているように¹⁾、敗戦処理のために召集されたボルドー議会は、2月26日のベルサイユにおける仏独講和予備条約の締結、3月1日の批准、3月3日のドイツ軍によるパリ占領によって、3月上旬、その役割りをほぼ完全にはたす。3月下旬、議会はボルドーを後にしてベルサイユに移転する。それゆえ、議会記者ゾラは3月22日から、ベルサイユ議会の模様を *La Cloche* の読者に伝えるための《ベルサイユ通信》を書くことになる。

平和条約を締結することによって「フランスの手足の切断」をおこなったこと、そして、この〈切断〉に反対するパリを非難する決議をおこなったこと、これがボルドー議会のおこなった主要なふたつの仕事であるとみなしていたゾラは²⁾、一刻もはやくボルドーをはなれ、パリに帰ることをのぞんでいた。それゆえ、議会の移転に関する噂やニュースに耳をそばだて、とりわけ、その移転先がパリであるという話題には最大の関心をはらい³⁾、それを大きな喜びをもってむかえていた⁴⁾。

「フランスが手足をもぎとられたこの劇場、この議場をできるだけはやく立ちさるがよい！ わたしは愛するひとが苦しみながら死んだ家に住みたくないと考えるひとたちの仲間である。」

「チエール氏はパリにかえることを決断している。(……) 遂にパリにかえることができれば、パリから追放されたわれわれの間には、大きな歓声があがるだろう。」

ゾラはこのように書いてパリ帰還の近いことを期待していた。ゾラにとって、首都はパリであり、ボルドー議会の役割りが終わった以上、政府、議会の移転先は当然パリでなければならなかった。彼の目からみれば、パリ以外の地に移転することは論外であった。ゾラにとって「地方」が「王制」「不寛容」「後退」を意味するのにたいし、パリは「共和国」「理性」「進歩」を意味した。パリは「崇高であり」、「祖国の中心、文明のふるさと、そして、天才たちが結実する熱い都会」である。「パリと呼ばれる進歩と自由のあの偉大なふるさと」に、政府、議会が帰っていくこと、それはゾラにとって、願望である以前に、自明の理であった⁶⁾。

しかし、パリ移転はゾラの考えるほど簡単ではなかった。「平和条約の調印はすでに忘れられている。ボルドーからの移転という大問題にくらべれば、それは小さな問題である」と皮肉をこめて彼自身書いているように⁶⁾、パリ移転は複雑な事情や利害や要素をふくむ、きわめて難解な政治的大問題であった。実際、この移転を発端として、やがてパリ・コミューンの内戦が勃発するのである。

右翼にとっては、ボルドーはゾラの考えるような屈辱や悲しみの地ではない。それはむしろ居心地のよいところであり、「(地方に)居坐りつづけるには、どうしたらよいかということを知ることのみが問題である」⁷⁾ほど、かれらはボルドーに固執していた。とりわけ、その移転先がパリであることに強い抵抗感を抱いていた。hobereaux たちはパリにたいして「青ひげ物語りをきく子供のように」恐怖心をいだき、「恐怖心を現実とみなし」、また、「恐怖心を誇張する」。かれらは敵国「プロシアがおそれた都市をおそれ」、そして「国民の代表が自分の首都をおそれるという滑稽な光景」をみせているのである⁸⁾。

当時の ruraux のパリにたいする恐怖と敵意については後世の多くの歴史家がふれており、ここであらためてくりかえす必要のないことのようにみえるが、Guillemin のいうように⁹⁾、「100年後の今日では、議会におけるパリへの敵意の激烈さは想像しがたい」とすれば、かれらの敵意と、敵意を裏返しにした恐怖とに十分留意する必要がある。しかも、この敵意と恐怖がパリ・コミューンの騒乱を惹起する原因のひとつであるとすれば、いっそう明確にそれを把握しておく必要がある。

「田舎紳士的、保守的多数派の目には、パリは混乱、動乱、革命など、

この多数派のおそれるすべてのもののシンボルである」と J. Chastenet は書いている¹⁰⁾。かれらにとって、「パリは組織的反抗の中心地、革命思想の首都」¹¹⁾、「フランスの癌、世界のスキャンダル」¹²⁾である。かれらはもともと「フランスには、パリ人とフランス人とが存在し、パリ人が真のフランス人にたいする支配権をうばった」のだと考えている¹³⁾。パリジャンは1848年革命という犯罪の前歴をもっているが、1848年の再来をもたらしてはならないという右翼の警戒にもかかわらず、1870年9月4日、ふたたび罪を犯した。それゆえ、こんどこそは、「利益と快楽のみをむさぼる下層民が支配する、あの醜惡な町パリを首府でなくすること」が必要であると考えているのである¹⁴⁾。

ゾラもまた notables のこのような姿勢を的確にとらえている。そして、彼はそれを怒りをこめ、露骨な言葉で攻撃している。ゾラによれば、右翼にとってパリは「怪物」であり、「フランスの最惡の敵」である。そして、かれらはプロシアと結んでこの〈怪物〉を「処刑しようとしているのである」。「かれら (royalistes) は革命都市の喉嚨をおさえている。かれらは今日この都市をしめこりたいのである¹⁵⁾。」

ゾラはこのような状況のなかでは、パリ移転が全く不可能であることを理解する。とりわけ、3月4日、パリに暴動がおきたという噂を耳にしてその感をふかめる¹⁶⁾。そして、2日後、彼はフォンテーヌブローへの移転のニュースをきいて、パリでなくても、フォンテーヌブローであれば我慢できると思うのである。フォンテーヌブローを好むのは、バルビゾンに住んで田園生活をたのしみ、清純さのなかで国事を議することができるからであると、なかばふざけながら書いているが¹⁷⁾、彼がフォンテーヌブローを愛するとおなじだけ、彼の敵、右翼はフォンテーヌブローを敬遠する理由をもっており、ゾラはそれを明確にとらえている。

3月7日の移転問題審議委員会は、結局、パリ2票、ベルサイユ13票という形でベルサイユ移転を決定したが、フォンテーヌブローがしりぞけられた理由として、そこに十分な要塞がないからであるとゾラはいつている¹⁸⁾。そして、それはそのままベルサイユがえらばれた理由を説明するものである。ベルサイユ移転は首相 Adolphe Thiers の巧妙な戦術、策謀をしめす一例であるが、この決定は右翼のみならず左翼にも一応の満足を与えた。しかし、ゾラはいつもは左翼の方針を支持するものの、左翼の同意をえたこのたびの決定には不満であった。職業的政治家

である左翼の代議士よりも、彼の方が政府当局の政治的陰謀をみぬいていたのである。

周知のように、元来、ベルサイユは「ルイ14世の町であり、ブルボン家の豪奢を思いださせるがゆえに、*légitimistes* に気に入らない筈はない¹⁹⁾」。ベルサイユに移ることは「王の家に」帰ることである。そして、議会は王家の紋章である「ユリの花に飾られた舞台を背景にして開かれる」筈である²⁰⁾。このような意味や意図が巧妙に秘められた移転であるにもかかわらず、左翼はベルサイユはパリ近郊であり、ひとまたぎでパリに帰還できると期待した。この期待がむなしいものであることをゾラは直観的に気づいていたのである。

実際、国会議長 Jules Simon は後になって、「フォンテーヌブローは正確に言えば *une sottise* にすぎなかった。ブルジュは *un attentat* であったであろう。ベルサイユは *un expédient* であった」というている²¹⁾。すなわちチュール政府は無防備のフォンテーヌブローに移ることなど全く考えておらず、一種のジェスチャーと韜晦のためにその名をあげたにすぎない。しかし、それかといってあまりにも明白な軍事的要衝であるブルジュをえらぶこともできなかった。それはパリに警戒心をめざめさせ、好んで不利な情勢をつくりだすことである。フォンテーヌブローやブルジュにたいして、ベルサイユは豪奢に平和を偽装し、他方ではすぐれた軍事都市である。大多数の国民の目をあざむくことができるこのようなベルサイユに議会をうつすことによって、パリを〈*décapitaliser* 非首都化し〉、「パリジアンを挑発する」ことが、議会の *majorité rurale* の意図であった²²⁾。右翼のこの遠謀深慮を適確に察知したのは職業政治家でなくて、一介の新聞記者ゾラであった。彼はつぎのように書いている²³⁾。

「そこにはきわめて強固なバリケードと、非常に深い塹壕と、すぐれた防衛組織とがある。プロシア兵はすぐれた腕をもっている。ギョーム皇帝の参謀があるところに移れば、議会は恐怖を感じる必要がない。(……)Pontoise でなくて、なぜベルサイユにするのか。国会は世界一の将軍ド・モルトケ氏によって防備された都市におかれているのだという甘美な思いのゆえに、たとえ邸宅のタンスのなかにプロシア将校の古いスリッパを見出したとしても、すぐにその

不愉快な気分は消えてしまうだろう。ありがたいことに、ドイツ兵がパリを砲撃してくれているだろう。かれらがわが代議士諸氏を Belleville や Villette から守ってくれるだろう。」

議会と政治府の移転先としてベルサイユがえらばれた背景を、このようにとらえているのは慧眼というべきであるが、この策謀の主謀者がほかならぬ彼の支持するチェールであることに彼は気づかなかった。彼はすべての陰謀は *majorité rurale* によるものであり、チェールはいたしかたなくそれにひきずられているものと思いこんでいる。これについては他の場所で論ずることとして、ここで留意すべき重要なことは、右翼、およびそれと結託し、あるいはそれを巧妙にあやつった保守的共和派がおそれたパリとは、パリ一般や漠然としたパリではなくて、下層民がむらがりあつまっている Belleville や Villette であるということである。すなわち、かれらがおそれるのは、地方に対立する都市としてのパリではなく、*notables* に対立し、その特権を剥奪しようとする労働者や職人が代表するパリなのである。

Fles Jules にとっては、敵はもはや正面にいたのではない。敵はなかにいるのである。敵はベルリンではなくて、Belleville である。すでに *les honnêtes gens* の間では、*bellevillois*, *bandits*, *scélérats*, *communistes* という語を同義語として使う習慣ができあがっていた²⁴⁾。」

H. Guillemin のこの指摘のように、*ruraux* が敵対するパリとは、ほかならぬパリの *la plèbe* (賤民) であるとすれば、ゾラがパリに組するということは、彼がパリの *la plèbe* に組するということにほかならない。彼は *la plèbe* のパリを敵視することもなければ、かれらの動きを警戒することもない。そして、右翼がパリに暴動がおきたといって不安にとらわれているにもかかわらず、彼は暴動の徴候のあることを全く否定し、右翼がいたずらにパリへの恐怖心をかきたて、パリ移転を回避する口実をつくっているにすぎないのだと考えているのである²⁵⁾。

しかし、実際には、インターナショナル連合評議会在が3月1日に開催され、2日後の3月3日には、*le Comité central* (中央委) の新規約が

承認され、Commission exécutive provisoire (臨時実行委員会) が設定されるなど、パリ情勢は majorité rurale にとって刻々と悪化の一途をたどっていた²⁶⁾。むろん、パリを挑発し、暴動を誘発し、それによって一気にパリを押しつぶすことが既定の方針であるとすれば、パリの事態は majorité にとっては望ましい方向にすすんでいたことになるが、それはともかくとして、ゾラはこのような具体的な動きや経緯を詳細には知らなくとも、すくなくとも、状況が緊迫していることだけは察知していた筈である。そして、状況がこのようにきわめて緊迫しているにもかかわらず、それを les honnêtes gens の主張とは対照的に、おそれおののくべき、また、うれうべき状況とみなすことなく、むしろ歓迎すべきものとみなしていたということは、ゾラが〈下層民〉ばかりでなく、やがて成立するパリ・コミューンをも支持したことを意味するものである。彼は Belleville の民衆の不穏な動きも、パリ・コミューンも、おそれるどころかむしろこれを歓迎し、逆に「パリ非難の決議」をおこなう議会の方をこそおそれるのである。

ボルドー議会が終るのが3月12日、そして約10日後に議会はベルサイユでひらかれるが、周知のように18日にはパリにコミューンが成立している。ゾラが《ベルサイユ通信 I》(1871年3月22日—4月18日)を執筆するのは、パリ・コミューンの真只中である。彼は彼自身の好悪や感情や希望を可能なかぎりこめて、パリ・コミューンにたいする majorité の動きや意見を報告するのである。

1871年のコミューンはレーニンのいうように、「ブルジョワ国家機構を〈粉碎〉しようとするプロレタリア革命の最初の試みであり、粉碎されたものに〈とってかわる〉ことのできる、また〈とってかわら〉なければならない《ついに発見された》政治形態である」²⁷⁾。ロシア革命や中国革命など、後の革命がパリ・コミューンの例にならって成功した事実がしめすように、パリ・コミューンはプロレタリア革命の歴史における画期的な出来事であった。

おそらくゾラは、パリの〈賤民〉に組したとはいえ、この〈暴動〉がプロレタリア革命史上において、これほど意義深いものであるという意識も認識ももたなかったにちがいない。彼はただ、パリ側が自治や選挙などを要求するにもかかわらず、右翼がさまざまな理屈をつけて、これに

干渉し、これを妨害するために、パリが反発し、ごたごたした状況が発生したのだという、単純な事実認識しかもちあわせていなかったであろう。しかし、このような単純な認識しかもっていないにもかかわらず、彼は直観的に、この状況がきわめて重大な意義をはらんでいることを見抜き、緊迫した状況や動きを適確にとらえ、そうすることによって《ベルサイユ通信》をきわめて緊張感にあふれた、密度の高い記事にすることができたのである。そして、事態の重大さをこのように直観的に理解しえたのは、彼が〈Belleville の労働者〉にたいして、つねに深い共感をいだいていたからにほかならない。すなわち、彼にとっては Belleville や Villette の動きはつねに善であり、これに敵対し、これを押しつぶすものはつねに悪である。民衆が大規模な動きを開始し、これにたいして majorité rurale があわてふためき、この動きをおしとどめようと懸命になったのをみたとき、ゾラはこの〈暴動〉は異常であり、それゆえにこそ意義深いのだと理解したのである。

パリ・コミューンにたいするゾラの態度については、さまざまに解釈され、本質的にはこれに反対、ないし、無理解であったという批評が一般的であるが、すくなくとも、*La Cloche* が発刊を停止される 4 月なかばまでのゾラの記事内容は、強固なパリ支持に色どられていることは否定できないであろう。たとえば、「パリの正当な誇りを満足させ、パリに自由をあたえ、パリを信頼するならば、パリ——真のパリは暴徒を追いはい、良識とパトリオチスムの大都会となるだろう」という言葉は、彼の絶大なパリ支持の気持をしめすものである²⁸⁾。そして、一般に彼はこの通信のなかで政府にたいする批判はほとんどおこなわないにもかかわらず、つぎにあげる記事のように、政府、とりわけ、外相 Jules Favre にたいして痛烈な言葉を用いているということは、コミューンを擁護し、〈暴徒〉の側にたつことも辞さない彼の姿勢をあきらかにするものである。

「降伏以来、ジュール・ファーブル氏はパリで人気がない。(……) 彼は緊急にして精力的な弾圧を口にした。そして、国民軍の武装解除をプロシア軍に許さなかったことを後悔しているようであった。(……) 〈多数の唾棄すべき分子をふくむあのパリの民衆〉云云という言葉、ジュール・ファーブル氏がいいはじめたとき、くそだ、

地方を呼びよせるがよい」という叫びを、セセ將軍はおさえることができなかったのである²⁹⁾。」

「暴動は国を奈落の底につきおとしたが、正式の合法政府がその破滅を致命的にするために全力をかたむけたのだと、後世のひとはいうだろう³⁰⁾。」

これらの引用からあきらかなように、ゾラはパリを支持して、パリの動きを押しつぶそうとする勢力を非難している。そして、これらの言葉は、暴徒を除いたパリではなくて、〈暴徒〉そのものの支持をあらわしているといっても過言ではない。なるほど、この引用の直前にあげたゾラの言葉のなかには、「パリ——真のパリは暴徒を追いはいらひ」云云とあるけれども、これはかならずしも、穏健派のみを支持し、暴力を忌避していることを意味するものではない。パリにたいして良識的に対処するならば、bellevillois が暴徒になることはありえないという確信を述べたものであり、逆に、かれらを不当に取りあつかひ、かれらの要望を無視するならば、善良なかれらは暴徒と化して、政府にはげしく敵対し、手におえない騒乱状態が確実に生じるのだとゾラは警告を発しているのである。しかし、ゾラのこの警告にもかかわらず、J. Favre や l'amiral Saisset は、Bellevillois がその中核をなす garde nationale をドイツ軍の手をかりて無力化しようとして³¹⁾、民衆のパトリオチズムの感情をさかなでしてかれらの怒りを爆発させたのである。それゆえ、ゾラによれば、「国を奈落の底につきおとす」〈暴動〉を発生させた全責任は、議会と政府が負わなければならない。〈暴徒〉こそ正当であり、支持されなければならないのは〈暴徒〉なのである。

ところで、〈暴徒〉を支持しているとはいえ、彼は決して政府の転覆や革命をのぞんでいたわけではない。その時点でパリが要求していたのは、市議会の代表を自由にえらぶ権利であった。ゾラは、政府がこの基本的で、当然の権利をパリに与えることをのぞみ、これを要求するパリを支持していたにすぎない。この要求は全く自然で、正当なものであるため、共和主義をかかげる以上、ベルサイユ政府はいかなる異議もさしはさまず、それを受けいれるであろうとゾラは単純に考えていた。彼は代議士 Pierre Tirard (Seine 選出. ex. gauche)³²⁾ の発言にそって³³⁾、暴

動をしずめるには、パリのこの要求をいれて市議会選挙をおこなうのが最良の方法であり、議会がそれに関する法律を制定すれば万事解決すると主張している。そして当然のことながら議会において、「市議会選挙に関する法案が審議されるものと期待していた」。彼によれば、議会はそうすることによって「良識を証明し」、暴動をおさめるという「緊急を要する事態に専念」できるはずであったからである³⁴⁾。

しかし、議会の *majorité rurale* はいうまでもなく、政府もまた、このゾラの単純な期待にこたえるはずはなかった。「議会はこの良識を愚弄し、大都市を援助しようとしなすい」どころか、「事態は重大ではないので、さらに悪化させるがよいと考え」、ゾラの期待するような「和解のための法」を制定しないで、「内戦をうみだすような法律をつくることをいそぎ(……)あの不幸なパリに最高の挑戦をいどんだのである」³⁵⁾。それゆえにこそ、なおいっそう、この暴動激化の全責任をひきうけなければならないのは議会の右翼多数派であるとゾラは考えるのである。「議会がのぞめば、秩序が確立される」というこのゾラの単純率直な言葉は、彼が内戦の一切の責任をパリ・コミューンから議会に転嫁し、一方的に議会を非とするものであり、彼がいかに強固に〈暴徒〉をもふくめたパリを支持しているかをはっきりしめすものである。

そして、さらに、市議会選挙において率先して投票することによって、コミューン支持の態度をいっそう明確にしめす。国民議会がやみくもに拒否し、政府が延期によって巧妙に回避しようとしているこの選挙を、彼は *élections municipales* (市議会選挙) と呼んでいるが、正式には *élections au Conseil communal de Paris* (パリ市評議員選挙) と呼ばれるものであり、後に略して *Conseil de la Commune* (コミューン評議会)、つづいてさらに簡単に *La Commune* と呼ばれるものの選挙である³⁶⁾。国民軍中央委員会 (*Comité central de la Garde nationale*) は選挙を3月26日に実施することをきめるが、投票の前日、内務委員 Antoine Arnaud と Edouard Vaillant の名で、パリ市民につぎのように訴えかけている³⁷⁾。

「市民諸君、明日、コミューン議会〔市会〕の選挙がおこなわれる。明日、パリ市民は、3月18日にあれほど公然と示されたその意思表示を、その投票によって確認しようとするのだ。(……)」

史上に前例のない、そしてその偉大さが日ましに増大しつつある、この革命によって、パリは輝ける正義の努力をなしとげたのだ。(……)

では投票せよ、市民諸君よ、(……)」

この訴えに呼応するかのように、ゾラは3月25日の記事の末尾にこのようにかいている³⁸⁾。

「わたしはひとつのことを宣言する——わたしは自分が執筆している新聞の責任にかかわるようなことはしたくないが、明日は投票することを公言する、と。」

それゆえゾラはこの選挙がいかなる意味をもち、そして、一票を投ずることが、なにを意味するかを承知のうえで、3月26日の投票にのぞんだといえることができる。むろん、多数のパリのブルジョワが政府や議会にたいする不満からこの選挙に参加したこと、および、投票の結果、modéré とみなされる議員が数多くえられたことを思いおこすならば³⁹⁾、ゾラもまたそのようなブルジョワジーのひとりとして、政府議会にたいして穏健な批判をおこなうために、一時的にコミューンに接近したにすぎないとも考えられる。あるいは、最善のものがえられないがゆえに、次善のもので満足したとも推測されるのであるが、選挙が平穩のうちに、無事おこなわれたことを、心底からよろこんでいる選挙当日の3月26日の記事を読むとき、ゾラがこの選挙を真実歓迎し、コミューンに全幅の信頼をよせていることが理解できるのである⁴⁰⁾。

「選挙は全き秩序のなかでおこなわれたという。かつてフランスがこのような光景をみせたことはなかった。(……) われわれはフランスを帝政と王政から永久に解放することになる、ひとつのシステムの端緒をひらいたところなのではないであろうか。(……)」

今は事件の渦中にいるので、評価をくだすことはできないが、あわれな議論をくりかえすペルサイユと、投票で和解するパリとの間で、わたしは本能的に、この偉大で高貴なパリに組するものだ。」

ところで、選挙が平穩のうちに終わったからといって、すべてが解決したわけではなかった。とりわけゾラにとって事はいっそう面倒であった。3月28日にコミュン宣言をおこなったパリ市庁舎の革命政府は、ベルサイユやチエールを無視することができたが、ゾラはコミュンをみとめると同時に、あいかわらずチエール政府をも合法的な政府とみなしていた。彼にとっては二つの政府が合法的なのである⁴¹⁾。しかし、Hôtel de Ville と、それを抹殺しようとするベルサイユを、ともにみとめることは、矛盾したことである。ほとんど解決不可能なこの矛盾をかかえこんで、彼はひとり窮地におちこんでいたのである。こうした矛盾した、苦しい立場を彼はつぎのように述べている⁴²⁾。

「パリに不正な政府があるかどうか、わたしは知らない。わたし
が知っているのは、ベルサイユには合法的な政府があるが、われわれはその腕のなかに盲目的にとびこんではならず、この政府の行動をコントロールするのが、われわれの第一の義務であるということである。わたしは権力にたいして真実をのべることによって暴動を支持するつもりはない。ただ、フランスを救うという重い責務をひきうけたひとびとに関して、あらゆる勢力とは無関係に、はっきりとわたしの意見を表明しつづけるつもりである。」

そして、敵対する二つの政府を支持するというこの奇妙な立場から逃れるために、ゾラはこの二勢力の和解と妥協を必要とした。しかし、妥協ないし和解の工作はチエールや多数派が頑として拒むものであって進展するはずはなかった。そして、ベルサイユ政府は4月2日、〈暴徒〉殲滅のために本格的なパリ攻略にのりだした。そして、政府軍の士気をたかめるために全力をかたむけ、たとえば、ゾラが書いているように「暴徒をたおした兵士に報償をあたえる法律を制定し(……) 同胞をもっとも多く虐殺したものに勲章をおくる」という「唾棄すべき行為」をおこなうのであるが⁴³⁾、内戦の激化と勝敗はゾラにとっての重大関心事であった。内戦になれば結局ベルサイユ軍が勝利するであろうと、彼は観測しているようにみえるが、ベルサイユ軍の勝利こそ彼のもっともおそれることである。ベルサイユ軍の勝利とは右翼王党派の勝利であり、それは〈白色恐怖政治 *terreur blanche*〉⁴⁴⁾の開始にはかならない。「議

会の *majorité monarchique* は勝ちとった成功を誇張し、自分たちがフランスの全き主人であると信じるがゆえに、わたしはベルサイユの勝利をおそれるのである」⁴⁵⁾、と彼は書いている。

ベルサイユの勝利をおそれるゾラは、パリの抵抗の強さに拍手をおくり、ベルサイユ軍の敗北をひそかな喜びをもってむかえる。たとえば、4月はじめに、チエールがベルサイユ軍の勝利を議会で報告したとき、ゾラはそれに「あまり満足せず、いくぶん、むかつきさえもした」と書いて、ベルサイユ軍の勝利にたいする嫌悪を控え目ながら表明している⁴⁶⁾。逆に Neuilly において正規軍が苦戦し、多数の戦死傷をだしたために、右翼の代議士が「パリの賤民ども」にたいして激怒し、「一部のひとが不安になりはじめる」のをみると、あるいは内務大臣 Ernest Picard (Meuse 選出, *centre gauche*, *avocat*) が「議会で勝利の報告をまったくやめ」、「ベルサイユが気をもむ」のをみると、ゾラは「いくらかの満足感」を味わうのである⁴⁷⁾。

彼がこのようにベルサイユ軍の劣勢を歓迎したのは、和解が可能であるのは政府軍が窮地においこまれているときのみであったからである。4月のなかばになって、すでにパリとベルサイユとが完全に決裂しているときにもなお、彼は「まだ和解の可能性はある」⁴⁸⁾と期待していた。二つの政府をみとめるゾラは、和解工作にたずさわった Clemenceau など、いわゆる妥協派に近い立場にたっていた。チエールの政府を正当とみとめ、その政府のもとで、パリが無傷のまま、自由と自治を享受する状況の到来を願う立場である。これはいわば虫のいい話なのであり、ありえないことであったが、このような考えをもっていたからといって、かならずしも、ゾラが政治思想的にとりわけ幼稚であったというわけではない。communard の多くはベルサイユにたいしてそれほど強い不信任や恐怖をいだかず、ある意味では、チエール政府をもふくめ、すべてにたいしてきわめて楽天的、楽観的であった。彼もそのようなコミューンの全般的雰囲気の中にあつたにすぎない。

そして、コミューンにたいする徹底的壊滅作戦が開始されてもなお、和解と交渉を期待したのは、かならずしもゾラのようなコミューンのシンパばかりではなかった。H. Guillemin が指摘するように、あまり強調されないことであるが、コミューン自身が和解の希望と期待をだいていた⁴⁹⁾。たとえば、コミューンの指導者のひとり Jules Vallès は、

国民軍が4月3日に le Mont-Valérien からの銃撃によって敗北を喫した直後、内戦の回避と交渉とを希望して、*Le Cri du Peuple* のなかで、「苦しみがつづき、血がながれるのを、ぜひとも回避しなければならない」と書いている。4月7日にも、「時とともに血があふれる。傷を閉じるときである」と書いて、内戦の熾烈化を心底からおそれ、和解の期待を表明しているのである。さらに4月19日には、コミューンのマニフェストが発表され、そのなかには〈この血なまぐさい争いを、フランスはやめさせるべきだ!〉という、絶望的な言葉をふくむ和解への期待が公表されているのである⁵⁰⁾。それゆえ、ゾラの主張は〈パリ市庁舎〉の意向にそい、それを代弁するものである。コミューナルとおなじように、コミューンがおしつぶされることをおそれたがゆえに、彼はしきりに和解を主張したのである。

もちろん、議会多数派も政府も、そしてまた反動分子たちも、ゾラやコミューンの声に耳をかたむけはしなかった。「国のあらゆる現実的勢力の友好的和解によって平和がもたらされることをねがう」と書いて、ゾラがコミューンをひとつの〈現実的勢力〉として、和解や交渉の現実的な相手とみとめるのになんとも、かれらは〈パリ市庁舎〉を〈反徒〉としかみなさない。交渉の相手どころか、おしつぶすべき対象である。それゆえ、ベルサイユは掃滅の意志をかためて、「パリ市庁舎以上に、武器をおくことに同意しないのである」⁵¹⁾。かれらはパリ鎮圧の長期化を前にしたビスマルクのいらだちを巧みに利用して、捕虜となっていたフランス正規軍を続々と返還させ、最初12,000人であった兵力を150,000人に増大させ⁵²⁾、一気にパリの革命の息の根をとめるのである。反動ジャーナリスト、L. Veuillot が書いているように、「ベルサイユのプロシア人（チエール政府）はベルリンのプロシア人がなしえなかったことをするだろう」⁵³⁾。

Veuillot がこれを *L'Univers* に書いたのは4月20日である。すでに勝敗のなりゆきはあきらかであった。*La Cloche* 紙は4月20日には発行停止となっており、ゾラもすでにパリをはなれていた。それゆえ、4月下旬の時点では、ゾラも戦闘が激化した場合、〈extermination〉がいずれの側におきるかを知っていた。しかし、4月10日の時点では、彼はまだ両者の力が互角であると信じていたにちがいない。「戦闘は当事者のいずれかの extermination によってしか終わらないであろう」と書い

ているからである⁵⁴⁾。このように彼は勝敗が決定的にあきらかになるまで互角を信じ、それゆえに、また、和解の可能性を信じていた。そして、このことは、彼が事態を客観的に眺めることができないほど、コミュニケーションに組していたことを証明するものである。いいかえれば、コミュニケーションがベルサイユの攻撃によっても解体せず、堅固に存続することをねがうゾラの希望が、ふたつの勢力が互角であるという判断を彼にもたせ、和解の可能性を信じさせていたのである。

ゾラの《ベルサイユ通信》は4月15日の執筆（4月18日発表）でひとまず終わり、内戦終了後の6月8日からふたたび継続されるが、コミュニケーション壊滅後は、ゾラがコミュニケーションの問題をとりあげるのは非常に稀である。その当初から4月15日まで、連日、コミュニケーションの問題が彼の記事にあらわれ、しかも、その存滅に一喜一憂していたといっても過言でないほど、彼の記事はコミュニケーション支持の色合いが濃厚であった。しかし、それ以後、異様に思えるほど、コミュニケーション問題が登場する記事はすくなくなる。コミュニケーションが重大な事件であったことを忘れたか、それとも、政治的判断からコミュニケーションにふれるのをさけたか、そのいずれかであるとみなすのが妥当かもしれないが、実際には、もっと単純な理由からであるように思われる。すなわち、もはや議会でそれが議事としてとりあげられないため、議会通信である《ベルサイユ通信》はそれにふれることができなかったにすぎないのである。

事実、議題にのぼれば彼はすぐにコミュニケーションにふれている。決して彼はコミュニケーションを忘れたわけでも、また、支持をやめたわけでもない。コミューナルの裁判や処罰などが時折議題にのぼるが、その場合つねに彼は、〈裁判の厳正〉の名のもとに苛酷な刑を主張する右翼から〈暴徒〉をまもらうとして、右翼を攻撃しているのである⁵⁵⁾。

「もう三カ月以上もまえから、あちこちで捕えられた一群の不幸なひとたちが、まったく取りしらべもうけないで拘留されている。(……) 大部分の囚人にとって——たとえかれらが犯罪人であるとしても——この三カ月の未決拘留は、それだけですでに、あまりにも苛酷な刑である。」

ゾラはまた、ニュー・カレドニアへの流刑の法案が可決されたときには、つぎのように述べて、royaliste にたいして、はげしい怒りの言葉を投げつけている⁵⁶⁾。

「フランスにおいては、餓死寸前の妻や子供など、不幸な家族や無実のひとたちが苦しみ、かれらから何千里もはなれたところでは、父親が死ぬほど不安におちいっているのであるが、貴族たちはこのような姿をみるのが楽しみなのである。(……)」

なげかわしいのは王党派の態度である。これら自称キリスト教徒たちの心はいまだに武装し、手のこんだ政治的復讐を夢みているのである。(……)

かれらの神は悪魔よりもおそろしい。(……)

議会は石のように固い心に自信があるので、罪人をまず島流しにし、つづいて、412票対222票で恩赦法を否決した。(……)

多数派はコミューンの罪人を情容赦なくたたきのめして自分の誤算の腹癒せをし、共和政府にむかって恨みをはらし、共和政府をゆっくりと墓穴に埋めているのだと思っているのである。死に近いがゆえに、ゆるしに近くなければならぬこれらの老人が、なげないほど怒っているのは、そのためであるとしか説明できない」。

この記事内容からはゾラがどの程度まで communard を支持しているのか、その程度については推測するほかはないが、かれらに共感もち、かれらを支援していることだけはあきらかである。彼が非とするのは〈コミューンの罪人〉ではなくて、かれらを〈たたきのめそうとする〉王党派のキリスト教徒である。そして、communard に深い共感を持ち、王党派をこそ〈たたきのめし〉たいと考えるがゆえに、ゾラは〈恩赦委員会〉を〈処刑委員会〉と呼んで挑発をおこなうのである⁵⁷⁾。

Commission des Grâces (恩赦委員会)はコミューン壊滅後まもなく、6月なかばに設立された委員会である。恩赦という名は付されているものの、ゾラのいうように、実際には処罰を決定する委員会である。同年11月末におこなわれた、blanquiste の Théophile Ferré、および、愛国心から communard となった職業軍人 Louis-Nathaniel Rossel にたいする銃殺をはじめとして、1871年から1873年にかけて、25人の com-

munard が Satory や le Prado で処刑された。また、1872年5月3日には、流刑者が Nouvelle-Calédonie にむかって護送される。さらに、1874年になってもバンセンヌで Bonnard が処刑されるなど（これが最後の処刑ではあるものの）、〈暴徒〉への報復はいつまでも尾をひいている。

議会で〈恩赦 amnistie〉が法案として上程されるのは1875年末、しかも、このときは挙手の裁決で簡単に否決され、全面的な amnistie がえられるのはようやく10年後の1880年である⁵⁸⁾。

このように rouges を徹底的に抹殺するために活動する、le comte de Bastard, le marquis de Quinsonnaz, le comte Duchâtel など、主として王党派に属する〈恩赦委員会〉のメンバーにたいして一部の左翼代議士が攻撃をはじめたが、そのひとり Francisque Ordinaire (Rhône 出身, avocat) は議場で〈Ces hommes sont des assassins!〉と叫び、懲罰に付された⁵⁹⁾。

これについてゾラは「Ordinaire 氏の怒りはきわめて遺憾である」と書き、さらに、ordinaire (普通) でない困乱が生じたと悪ふざけをつけくわえている。彼はこの懲罰を当然とみなし、一見、Ordinaire に全く同調していないようにみえる。Ordinaire の言葉はあまりに露骨で「議会的」でないとして彼に全面的に非があると書いているのである。しかし、〈恩赦委員会〉のかわりにゾラが用いた〈Commission des Exécutions 処刑委員会〉という表現も、Ordinaire 代議士の〈des assassins ひとごろし〉といういい方と大同小異である。そして〈Commission des Exécutions〉という表現が〈des assassins〉と全く同質の攻撃と挑発をふくんでいることを彼は知らないはずはなかった。それにもかかわらず、多数派に同調したような形で、〈des assassins〉を不適切であるとしているのは、ゾラが使った一種の輜晦であるように思われる。おそらくゾラもかれらを〈ひとごろし!〉と叫びたかったにちがいない。Ordinaire を血祭りにあげることによって、彼もまた〈ひとごろし!〉と大声をあげているのである。〈Commission des Exécutions〉という表現についても、〈後世、歴史が Commission des Exécutions と名づけるであろう Commission des Grâces...〉云々と書いているように、彼はこの挑発的な表現が彼自身によって生みだされたものであるという印象を与えないようにつとめているのである。おそらくゾラの意図は〈恩

赦委員会〉の実体、すなわち、communard を処刑し、rouges を抹殺するというその実体を巧妙に暴露することにあつたにちがいない。そして、彼はある程度そのことに成功した。彼の記事が当局の注目をひき、*La Cloche* が起訴の危険にさらされたからである。この危険について警告するために、編集長 Louis Ulbach は数日後の1871年12月16日に、ゾラに宛ててつぎのようにかいている⁶⁰⁾。

「あなたは『ラ・クロッシュ』紙に非常に大きな危険をおかさせました。この危険がさけられるかどうか、たしかではありません。恩赦委員会にたいする侮辱のゆえに、あなたを起訴するという問題がおこりました。どうか慎重になってください——極度に慎重に。財政面においても、職業的名誉においても打撃をうけ、破局においやられてしまいますから。」

ところで、いままでわたしはゾラが《ボルドー通信》および《ベルサイユ通信》において、終始一貫、1871年のコミューンの支持者であつたと主張してきた。実際莫大な量にのぼるこの通信のなかから、コミューンにたいする批判や、誹謗をふくんだ記事を見出すのはかなり困難である。むろん、そのような記事が皆無というわけではない。たとえば、1872年1月5日、1871年12月8日、1871年9月13日の記事がそれに類するものといいうるであろう。

これらの記事の内容について簡単にふれるならば、まず、1872年1月5日の記事では、ゾラは、内乱の折に損害をうけた警官に賠償金を支払うという法案に、ただひとりだけが反対したことをとりあげて、この反対票は *communeux* のものだとしている。そして、〈コミューンのこの擻猛な闘士〉は敗北を喫したコミュナールにも、当然、賠償金が支払われるべきだと考えて反対したのであり、このような考え方は〈卑劣〉であるとゾラはつけくわえている⁶¹⁾。

つぎに71年9月13日の記事では、ゾラはつぎのように書いている⁶²⁾。

「Henri Brisson 氏がまず反徒のための *amnistie* を要求する法案を提出した。(……) わたしの考えるところでは、Brisson 氏はあまりにもラジカルであつた。〈コミューンや中央委員会にくわわ

っていた〉全暴徒の恩赦を要求したが受けいれられなかった。あらゆる犯罪とあらゆる災難を欲した指導者たちに罰をひきうけさせ、狂人や異常者や兵卒や労働者などの恩赦のみを要求したならば、彼はもっと成功したであろう。」

最後に、同年12月8日の記事では、1871年11月30日、マルセイユの革命家 Gaston Crémieux にたいしておこなわれた処刑についての Maurice Rouvier (Bouches-du-Rhône 出身, extrême gauche, journaliste) の議会発言をとりあげ、ゾラはつぎのように書いている⁶⁸⁾。

「Rouvier 氏はマルセイユのひとである。彼は Crémieux を知っていた。彼は友だちであった。血なまぐさい思い出を残したこの人が狂人 (tête folle) でしかなく、しかも、彼の犯罪はひとつの死体をも要求しなかったことを、彼は南仏のすべてのひととおなじように知っていた。」

《ボルドー通信》および《ベルサイユ通信》の二つの議会通信のなかで、ゾラのバリ・コミューン支持に疑問を抱かせる記事としては、わたしの気づくかぎりでは、この三編のように思われる。しかも、これらの記事も、かならずしも、コミューンを否定したり、そしったりしているものとは断言しがたい。Crémieux を〈狂人 tête folle〉と形容し、コミューナルを〈狂人 des fous〉や〈異常者 des égarés〉といったからといっても、後年、彼が *La Bête humaine* のなかで、血に飢えた殺人鬼であり、一種の狂人である Jacques Lantier を深い共感をこめて描いていることを考えるならば、このような表現によってかれらを非難しようとしたのではなく、このような政治社会においては狂気こそ正常であるとみなして、かれらを擁護しようとしているのだともいえるのである。もちろん Jacques Lantier を作品に登場させるのは、約20年後であり、1871年という時点で、ゾラがこれらの〈狂人〉や〈異常者〉にたいして、Jacques Lantier にたいするのと同じ共感をもっていたとは断言しがたい。しかし、逆にまた、かれらを誹謗しているのであると、単純にわりきることもしできない。それはあまりにも表面的な浅い解釈というほかはない。

おなじように、「あらゆる犯罪と災難を欲した指導者」という言葉のなかにも、コミューンの指導者にたいする悪意と中傷のみを見出すべきではなかろう。*Germinal* の Souvarine や、*Paris* のアナーキストやテロリストのなかにさえ、彼は彼自身の感情や思想の多くを注ぎこんでいるのである。

この三つの記事では、警官への賠償金に反対した〈communeux〉の〈卑劣さ vilénie〉を非難した記事のみが、ゾラのコミュナルへの反発ないし不信を感じさせるが、わずかこれだけで、ゾラのコミューンへの支持を根本的に疑問視することはできない。コミューンを否定しているとみなすには、あまりに断片的な言葉である。もともとゾラはコミュナルではなくて、そのシンパであり、この程度の嫌味をいうのは当然であり、また、ここでは〈communeux〉という語をただ通俗的に〈過激派〉あるいは〈かわりもの〉として用い、機知を弄して記事におもしろみをそえることだけを考えているとしか思えないのである。それゆえ、これら三つの記事はゾラのコミューン支持について、それほど重視すべきものではない。

このように、わたしは *La Cloche* の記事から判断して、ゾラはあくまでもコミューンの支持者であったと考えるのであるが、ゾラがコミューンを敵視し、それと無縁であったとみなす論者は決してすくなくない。

Roger Ripoll は「ゾラは最初の独立した姿勢や、四月に宣言した偏見拒否の態度をすて、徐々にコミューンにたいして敵意をあきらかにした」と書いている⁶⁴⁾。また、Aimé Guedj は「彼のアンガジュマンの勇氣は否定しえないが、一部のひとたちの目には、彼は革命を恐怖する保守的ブルジョワにみえる」といっている⁶⁵⁾。Henri Mitterand も、「彼はパリのプロレタリアートの革命運動には無縁であった」と述べている⁶⁶⁾。さらに、Pierre Pillu によれば、「彼は帝政の末期に、寛容で、情熱的で、辛辣な反体制派の役割りををはたすが、激烈な社会の変化はのぞまない。それゆえ、彼はコミューンにおどろく。(……) いわゆる革命運動としてのコミューンにたいする彼の根元的な敵意は(……) かくしきれないのである」⁶⁷⁾。

ゾラとコミューンの関係をとらえた論文はそれほど多くはないが、その主要な論文が、このように、ゾラのコミューン支持にたいして

否定的である。そして、その論拠は主として *Le Sémaphore de Marseille* のゾラの記事である。R. Ripoll は「*La Cloche* の記事のほかに、1871年4月と5月に、*Le Sémaphore de Marseille* に執筆した記事を参照しないならば、ゾラのコミューンにたいする態度を語ることはできない」と書いて、この記事の重要性をことさらに強調している⁶⁸⁾。この記事は無署名のためにその全貌があきらかにされておらず、ゾラ全集にもまったくのせられていないのであるが⁶⁹⁾、Ripoll や Mitterand はあきらかにゾラの書いたものと推定される記事をいくつか拾いあげてきて、それをもとにして論じているのである。

Ripoll は、たとえば、私生児、パン屋の夜勤、身分証明書、質屋、裁判所付属吏、新聞の発行停止など、いくつかの問題に関してコミューンがとった「革命的処置」にたいして、ゾラの「反応が敵対的」であったことを重視するのである⁷⁰⁾。Ripoll はゾラのつぎのような記事をその例として引用している。

「いくつかの弊害を多少とも適切に改革しようとするだけで満足していたならば、コミューンは現在もっと多くの友人をもち、パリ全体がある範囲内でそれを支持するだろう⁷¹⁾。」

「これはまったく滑稽だ。これらのひとたちは若気のあやまちで私生児をまきちらしたが、この大家族を育てる母親の役割りを祖国におしつけたのだ、とひとびとは思うだろう⁷²⁾。」

「最良の方法は労働者と経営者を仲良くさせることだと、委員のひとり、シャラントンの健全な頭脳の持主が宣言したが無駄であった⁷³⁾。」

ゾラがコミューンに敵意をもっていた証拠の一例として、R. Ripoll が拾いだしたゾラのこれらの言葉は、たしかに、*La Cloche* の記事に見出されたような、コミューンの成否を一喜一憂しながら見まもっていたときにゾラが用いた言葉と非常にかけはなれている。彼は *La Cloche* が発行停止になる4月なかばまでは、パリ・コミューンの成立を喜びをもってむかえ、その存続をいのり、そして、それが右翼多数派によって

おしつぶされはしないかという不安と怖れをいさながら記事を書いていた。しかし、この引用にみられるのは、第三者として高圧的にコミューンを批判する態度であり、さらにまた、コミューンの施策をやじり倒そうとする悪意にみちたとさえいえる姿勢である。

この引用でもすでにいくぶんあきらかなように、Ripoll や Mitterand によれば、ゾラはとりわけコミューンの指導者たちを不当に取扱っている。「敢然とたたかった Millière や Delescluze や Rossel の英雄的行為を考えるならば、ゾラが描くかれらの肖像は cruel で injuste でさえもある」と Mitterand は書いているが⁷⁴⁾、Ripoll がゾラはコミューンにたいして敵意をいだいていたのだと考えるのも、コミューンの指導者に関する誹謗や揶揄ともみられる描写や記事を *Le Sémaphore de Marseille* のなかにいくつか見出すからである。

Ripoll の指摘する記事によれば、ゾラは blanquiste の Raoul Rigault について、「精神の調子が狂い、頭が混乱し、最初、怠惰と虚勢から社会と断絶したが、やがて、理論から実践にうつるとき、宿命的にもっとも危険な狂人のひとりとなった」と書いている⁷⁵⁾。おなじく blanquiste で、インターナショナルに属する Jules Miot については、「牢獄のくらやみのなかで生活していたがゆえに、あかるい太陽のなかに放たれたフクロウのように、あらゆる舗石に額をぶつける48年革命の幻にとらわれた老人」であると書いている⁷⁶⁾。さらにまたゾラは、Semaine sanglante の終りごろにバリケードで壮烈な死をとげた、コミューンの英雄 Charles Delescluze についても、「もっとも分別ある頭脳をもくるわせ、無害な夢想家をきわめて危険で狂暴な獣にかえてしまう、あの空想とあの壮大な愚劣さとのなかで彼は年老いたのである」と書き⁷⁷⁾、彼を年老いた老人とみなすのみで、革命家としての彼の偉大さに思いを馳せようとする気持ちはまったく見られないのである。

Ripoll が提示するこれらの記事を前にすれば、だれしも、ゾラはコミューンに敵意をいだいていたのだと断言したくなるであろう。しかし、この記事だけを一方的にとりあげ、それ以前の *La Cloche* の記事を見無視するのは適切さを欠くことである。いずれか一方だけを強調するのは危険である。いずれの見方もゾラの真意である。おそらく彼はコミューンを熱烈に支持しながらも、同時に、それに全的に合体することのできない違和感をいだいていたにちがいないのである。

ゾラのなかにこのような姿勢ないし感情が生まれたのは、ひとつには彼の政治思想——というよりも政治イデオロギーのためである。彼には明確な政治思想はなく、また、彼の政治的イデオロギーもそれほどあきらかにすることはできないが⁷⁸⁾、彼がこの通信記事で支持する政治家から、彼のおよその政治傾向を判断することはできる。彼はとりわけ V. Hugo や L. Blanc や E. Quinet を支持しているが、彼の政治イデオロギーはほぼかれらと同じである。かれらは左派共和派に属し、通俗的にいえば、民衆に組するものの、民衆と明確な一線を劃する。たとえば具体的な問題であるコミューンについていえば、L. Blanc はそれがあまりにも画期的であるがゆえに批判的である。ユゴーもまた、基本的にはそれを認めながらも、〈une bonne chose mal faite〉とみなして⁷⁹⁾、理想主義的な別の何かを求めている。かれらとおなじように、ゾラもあきらかにコミューンにたいして距離をおき、コミューナルに完全には近づこうとはしない。

このような態度をとっているのは、Mitterrand のいうように⁸⁰⁾ゾラがかならずしもコミューンの意義を理解せず、「Hôtel de Ville」の布告をまじめに考えない」からではない。また、Ripoll のいうように⁸¹⁾、「パリでおこなわれていることの意味が彼に通じない」のでもなければ、「コミューンの行為やコミューナルの精神のなかにある新しいすべてのもの、本当に革命的なすべてのことが彼に理解できなかった」のでもない。真に革命的な施策がほどこされていることを理解しえたがゆえに、彼はそれを前にして、ある場合にはたじろぎ、また、ある場合には不満を抱いたのである。コミューンにたいするゾラの態度を批判するとき、気をつけなければならないのは、彼は政治家でもなければ、指導者でもなく、一介の新聞記者にすぎないということである。彼は世論や大衆をみちびくものではなく、導かれる側に属している。導かれるものとして、導くものを批判したからといって、すぐに *hostilité* を抱いていたとはいいがたい。そのうえ、Guillemin もいうように、1871年のコミューンは1917年の10月革命の〈総稽古 *répétition générale*〉ではなく、また、理論や思想が明確でなくて、内部における意見の統一もあまりみられなかった。「なにを欲しているかを知っている 幾人かの〈*internationaux*〉をのぞいて、〈*communeux*〉の大多数は(……)民衆に共鳴し、不正に反対し、共和国と〈自由〉をのぞんでい」たにすぎなかつ

た⁸²⁾。また、あの Vallès さえも、「3月18日、Comité central を構成する〈noms obscurs〉をまえにして(……)〈inquiétude〉を感じたのである」⁸³⁾。このような状態にあったコミューンをまえにして、一介の記者であるゾラがその意義やあたらしさを適確に浮きぼりにしえなかったからといって、彼を責めることはできない。

おそらく、とりわけコミューンにたいして批判をつよめ、不満をふかくしたと思われるのは、*La Cloche* の発行停止であろう。「コミューンにたいする敵意はかくさないけれども、同時に、ベルサイユの右翼を辛辣に弾劾した大日刊紙の正規の通信員であった彼は、二つの陣営に敵をつくる」と Mitterand は書いているが⁸⁴⁾、彼が敵意をしめすとみなされるのは *La Cloche* の発行停止後である。官憲の圧力に抗し、編集長の顔色を気にしながら、コミューン支持の記事を書きつづけたにもかかわらず、そのコミューンから執筆の機会を剝奪されて、彼は深い不満と激しい怒りを感じたことは容易に想像されるところである。帝政末期以来、なによりも言論と出版の自由を提唱しながらジャーナリズムにたずさわっていた彼にしてみれば、その自由を守る筈の側から、それを禁じられたことは、我慢のならないことであったにちがいない。この不満や立腹が、*Le Sémaphore de Marseille* の記事にみられるような、コミューンにたいする誹謗にちかい批判となって、一時的に爆発したのである。

そして、このような政策を立案し、実施するのは、いうまでもなく指導者であって、一般の大衆ではない。それゆえ、全責任を負わなければならないのはコミューンの指導者である、というのがゾラの考え方である。Mitterand や Ripoll や P. Pillu が指摘するように、彼は一般大衆と指導者とを区別し、民衆にたいしては終始一貫、pitié ないし共感をもっている⁸⁵⁾。パリの〈賤民〉を罵倒する G. Sand とは全く反対に、彼は民衆一般、コミュニナール一般にたいしては、いかなる不満や怒りも抱かず、かれらに共感と支持を惜しまない。いいかえれば、彼はコミューンそのものを否認するつもりはない。コミューンは「古い世界の朽ちた支柱に向かって放たれた、群衆の抗いがたい野生」⁸⁶⁾ が生みだしたものである。まさに自然主義的な形で生みだされたこのコミューンをゆがめるのが指導者であり、この指導者にこそゾラは不満を爆発させなければならなかったのである。

しかし、ゾラは指導者と一般民衆とを区別し、後者にのみ共感を抱いたとはいふものの、すべての指導者を、ひとしなみに罵倒したわけではない。たとえば、コミューンの指導者のひとり Gustave Courbet にたいしては、すくなくとも〈彼の政治的役割り〉に関するかぎり、ゾラは〈冷笑的〉ではなかった⁸⁷⁾。また、Jules Vallès にたいしても、ゾラは非難や批判をあげてはいなかったにちがいない。というのは、後になって Vallès は作品の出版にあたってゾラをたよっているからである。もしゾラから嘲罵をあげていれば、Vallès はゾラに援助をもとめるはずはないのである⁸⁸⁾。

ところで、コミューンの指導者にたいするゾラの誹謗や中傷をとりあげるとき、見逃してはならない重要なことは、これらの指導者がすべて、すぐれた革命家であったかどうかという問題である。なるほど Rigault や Delescluze への誹謗は、ゾラの政治的無知を露呈するものであるかもしれないが、しばしば指摘されるように、コミューンの指導者は玉石混交であった。Ripoll や Mitterand はゾラが Gaston-Pierre Da Costa や Félix Pyat や Louis-Nathaniel Rossel を嘲笑していることもまた、ゾラのコミューンにたいする無理解や無知をしめす例のひとつにあげているようであるが、現在、Pyat は「議論と論争とへの趣味からすべてを込みいらせ、明確な理念も、プログラムももたない唾棄すべき政治家であり（……）議会陰謀家」であるとみなされており⁸⁹⁾、Da Costa はやがて〈boulangiste de gauche〉となって「次第に社会主義から遠ざかった」ばかりでなく、「逮捕されたとき、密告によって判事を動かそうとした」指導者である⁹⁰⁾。Rossel もまた、Commune の理念には無関係に、単なる職業軍人として garde national の参謀総長となり、まもなく〈裏切り〉のゆえに投獄され、ほどなく脱獄した指導者である⁹¹⁾。

このような人物がまじる雑多な集合体のなかから、すぐれた指導者をふるいわけるとは至難のわざである。コミューンの期間中にバリケードで英雄的な死をとげた指導者たちは、ひとしなみに殉教者となりうるが、生きながらえていれば、正統社会主義から逸脱する可能性が十分にありえたことは、Da Costa の例が雄弁に物語るところである。そして、ゾラが *Le Sémaphore de Marseille* のなかで書いた誹謗や揶揄が、Rigault については的はずれであったとしても、すくなくとも Da Costa

については有効であり⁹²⁾、また、彼が Courbet にたいしてはほとんど誹謗の口調を用いず、Vallès にたいしては全くふれていないことを考えるならば、ゾラの悪態のなかにもいくぶんの真実がふくまれており、それゆえ、彼が指導者を狂人呼ばわりしたのは、かならずしも、コミュニケーションにたいする無知や敵意からではなかったといえるのである。

しかし、重要なことは指導者に関する彼の攻撃が正鵠を射ていたかどうかではない。また、彼が悪態をつくにいたった原因が、Maxime Du Camp や Théodore Duret の影響によるものかどうかということでもない⁹³⁾。さらにまた、Sand や Goncourt ほど反動的でなく、終始大多数のコミューナルに pitié を抱き、ベルサイユの苛酷な弾圧に反対したがゆえに、彼の無知や悪態の罪は、情状酌量されるべきであるということでもない。重要なことは、彼がコミューンを一種の〈folie〉とみなしているということである。彼はコミューナルについて、〈esprit détraqué〉、〈force brutale〉、〈une bête enragé〉、〈un fou〉、〈cette grosse bête〉、〈ces fous furieux〉、〈la bête humaine〉などの言葉をしばしば用いているが⁹⁴⁾、これらを文字通りに通俗的に解釈して、ゾラはコミューナルを〈狂人〉や〈けだもの〉とみなして、敵意をもったり、あるいは、軽蔑したりしていたのだと考えてはならない。これらの言葉のなかに文学的意味を嗅ぎとるべきであろう。

「率直にいて、わたしは一挙にわれわれを回復させてくれるような、なにか大きな catastrophe の方がはるかに好きである」とゾラは書いているが⁹⁵⁾、彼のなかには catastrophe への志向が根強く巢食っており、とりわけ後期の文学作品に顕著にあらわれてくる。*Germinal* についていえば、〈芽生え〉が実現されるのは、着実な革命運動によってではなく、政治的弾圧によってこの革命運動がついえさり、追いつめられたアナキスト Souvarine が、ダイナマイトによって、彼自身爆死しながら狂気のようにこの世界を爆破させた後である。ゾラはこの Souvarine にたいして、*Paris* に登場するテロリストやアナキストにたいするのとおなじ共感を持ち、炭坑爆破と爆死という、ほとんど無意味に近い狂気の行動を、あたらしい世界の夜明けのために必要欠くべからざるものとして描いているのである。

Guedj のように、「ゾラにとって、革命とは un système ではなくて、une explosion でしかありえないのである」⁹⁶⁾。彼は現実的かつ

着実にあたらしい社会や制度を築きあげようとする人たちよりも、この世界の〈explosion〉に向かう人たちに、より深い共感をいただいている。explosion や catastrophe への指向は、むしろ狂気にはかならない。しかし、彼にとっては、世界の変革のためにはこの狂気が必要なのであり、彼はこの狂気を好むのである。彼が1871年のコミューンをfolie collective と呼び、また、革命家を fou とみなすということは、いうまでもなく、彼がすぐれた革命家や政治家や歴史家ではありえないことを明かすものであろうが、決して彼はこれらの狂人や狂気を、唾棄すべき、愚劣なものとは考えていない。むしろ彼はそこに、あたらしい世界を創造するための起爆剤を見出しているのである。

「どんな社会をつくる場合にも、嵐がまきおこる」と書いて、ゾラはあたらしい社会をつくる場合の動乱や狂気を積極的にみとめている。彼によれば、monarchie を確立するための「肥料」として、「絞殺、毒殺、虐殺、あらゆる恥辱と悲惨」が必要であったように、〈共和国〉をうちたてるためにも〈流血〉が必要なのである⁹⁷⁾。ゾラがここで使っている〈流血〉、すなわち、〈ruisseaux de sang〉や〈mer de sang〉という言葉は、おそらく、とりわけ semaine sanglante に流された夥しい血をさすものであろうが、彼はこの流血を、チエールの反動的共和政府がパリ・コミューンの民衆に強いた流血とみなさず、パリ・コミューンそのものを、流血による浄化の事件、ないし、清めのための大運動とみなしているのである。

しかし、このような見方をとっているからといって、ゾラはコミューンの弾圧によって、Rigault や Delescluze など、〈狂気〉の部分が切りとられたのだと考えたわけではない。H. Guillemin はゾラが *La Débâcle* のなかで、コミューナルの Maurice の視線を〈un peu fou〉とえがき、また、コミューンの弾圧は〈必要な刺絡〉であり、「とりのぞかれるのはフランスの悪い部分」であると書いているとあって、「*La Débâcle* において、なによりも遺憾であるのは、彼のパリにたいする批判であり、コミューンの原点に関する嫌悪すべきイメージである」と書いている⁹⁸⁾。しかし、このような言葉が用いられているとしても、それは部分的であり、これらの言葉に過度に大きな意味を付与することはさしねなければならない。ゾラが *La Débâcle* のコミューンの描写によって、とりわけ示そうとしている意味は、すべてが血と火の海のなかで浄

化されるということである。たとえ現実には、血の海の生贄となるのは Belvillois であるとしても、ゾラが思い描いているのは、空高く噴きあがる火焰のなかで、世界が完全に燃えつきてしまう光景である。

ゾラは議会記者時代にすでに『ルーゴン・マッカール双書』にとりかかっていたが、この作品は世上しばしば評されるような、遺伝や環境の研究などとはほど遠く、いわば、一社会の崩壊と壊滅の物語りである。すべてが破滅とカストロフにむかって突進する物語りである。富めるものも貧しいものも、搾取するものも搾取されるものも、悪人も善人も、弱者も強者も、すべて破滅と崩壊にむかってすすんでいく。なるほど、古今東西、多くのすぐれた文学作品は破滅をえがいている。しかし、それは物語りのひとつの帰結であって、それが主題ではありえないのにたいし、一家族ないし一社会の崩壊が『ルーゴン・マッカール双書』の主題なのである。

ゾラはこの社会や世界は腐敗や悪や汚濁にみちみちているがゆえに、やがては終末をむかえるはずであり、また、むかえなければならないと考えている。人類史とは犯罪に犯罪をつみかさねた歴大な犯罪史にはかならない。この過去を一度清算しなければならない。悪や罪にみちた過去を徹底的に破壊し、葬りさっておかなければならないのである。ゾラにとっては、この破壊ないし清算の後にしか、未来をひらき、あたらしい世界を築くことができない。そして、過去を破壊し、世界のダブラ・ラーサをおこない、汚れた世界を清めることができるのは、神の劫火と政治革命とである。後年、彼が古い世界のダブラ・ラーサの後に創造される人類の楽園を描いた *Les Quatre Evangiles* 四部作を書いたことは、この終末と新生の思想の一端をうかがわせるものであるが、神を信じない彼にとっては、劫火による浄化はむなしい希望であり、イリュージョンにすぎなかった。

一方、社会主義革命もまた、この悲惨な古い世界に終止符をうち、地上に楽園をつくり出すという意味で、ゾラのダブラ・ラーサへの希望をみたすものであるが、政治革命はきわめて現実的であり、それゆえに不徹底と不完全に満足しなければならず、古い世界の完全な瓦解を夢みるゾラには物足りないのである。

神をもたないゾラにとって、劫火がイリュージョンであり、他方、完全な浄化をねがうゾラにとって、社会主義革命が現実的で、不徹底であ

るとすれば、彼がこの世界の新生に期待をかけることができるのは、アナーキストやテロリスト以外にない。「一階級の打倒よりも、社会全体の壊滅を期待し」、「革命とはアポカリプスである」とみなすゾラにとっては、「ひとつの時代の崩壊」を可能にするのは、「規則や理論の域外にあって、通りすぎながらすべてを一掃する自然の力」であるかれらアナーキストおよびテロリストのみである⁹⁹⁾。

ゾラがコミューナルに期待するのは、決して通常の政治革命ではなく、*Paris* のアナーキストや、*Germinal* の Souvarine や、*La Bête humaine* の Jacques Lantier のように、fou となり、criminel となって、幾世紀にもわたる支配と搾取と抑圧にたいして、深い憤怒と激烈な憎悪とを狂気として爆発させ、一挙に世界を崩壊にみちびくことである。かれらはまさしく fou であり、criminel であるが、かれらを生みだした人類史そのものが fou であり、criminel である。この悪循環をたつために、folie が必要である。folie のみが古い世界を炎上させることができるのである。

ゾラが *La Débâcle* のなかで、とりわけ力をこめて描いているのは、炎上するパリの光景であるが、焼きつくされたのは事実上はコミューンそのものであったにしろ、ゾラがそこに見ようとしたのは、古い世界の炎上にほかならない。神の助力を仰ごうと、悪魔の手を借りよう、あるいはまた、fou や criminel の爆弾にたよろうと、この世界が炎上し、壊滅しさえすれば、それで十分なのである。このタブラ・ラーサの後のみ、真に無垢な世界が〈芽をふき〉、地上の楽園が生まれ育つのである。

しかし、コミューンの semaine sanglante において、第二帝政の炎上とともに古い世界は消滅した筈であったにもかかわらず、新生の第三共和国は l'Empire におとらず腐敗や狂気や悪の渦まく世界であった。世界の終末と新生にたいする彼の期待は完全に裏切られたのである。むしろ彼の期待は壮大なファンタジーであり、みたされないのが当然なのであるが、彼がこのような終末と新生の図式にもとづいて、*Les Rougon-Macquart* から *Les Trois Villes* さらに *Les Quatre Evangiles* へと作品を書きすすめていったことはあきらかである。そして、彼のコミューンにたいする見方も、この図式のなかで考察されなければならないのである。

〔注〕

- 1) Jacques Chastenet, *Histoire de la III^e République*, t. I (*Naissance et Jeunesse*), Hachette, 1952, p. 62.
- 2) Emile Zola, *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 427 (12 mars 1871).
 〈A la vérité, il n'y a eu que deux séances, celle où l'on a signé la paix et celle où Paris a failli être décrété de trahison. (...) je sens que je n'y laisse que deux faits: le démembrement de la France et la mise en accusation de Paris.〉
- 3) *Ibid.*, p. 398 (2 mars 1871).
 〈On dit aussi que M. Picard rappelle à Paris le personnel du ministère de l'Intérieur qui se trouve ici, ce qui signifierait que Paris redeviendra capitale très prochainement.〉
- 4) *Ibid.*, pp. 398 et 404 (2 mars et 4 mars 1871).
- 5) *Ibid.*, pp. 420, 662 et 924.
 そのほか 〈cette ville, si grande dans la douleur et si haute dans l'intelligence〉 (p. 658), 〈ce grand soleil, ce grand foyer du progrès〉 (p. 421), 〈la grande et glorieuse ville qui vient de faire l'admiration du monde entier〉 (p. 405) など、バリ賛辞はいたるところにみられる。
- 6) *Ibid.*, p. 405 (5 mars 1871).
- 7) *Ibid.*, p. 406 (5 mars 1871).
- 8) *Ibid.*, pp. 405, 409 et 417.
- 9) Henri Guillemin, *L'Avènement de M. Thiers et Réflexions sur la Commune (Les Origines de la Commune IV)*, Gallimard, 1971, p. 124.
- 10) Chastenet, *ouv. cité*, p. 62.
- 11) *L'Avènement de M. Thiers, ouv. cité*, p. 125.
 極右の代議士 Louis de Belcastel (Haute-Garonne 選出, avocat, monarchiste, catholique ultramontain) の議会発言 (1871年3月12日)。
- 12) *Ibid.*, p. 126.
 Louis Veuillot が1871年2月2日, 彼の *Univers* で用いた言葉。
- 13) *Ibid.*, p. 125.
Le Nouvelliste de Versailles, journal allemand de langue française, 24 octobre 1870 に見出される言葉。
- 14) H. Guillemin, 《Notules》 dans *Europe*, n° 499-500, novembre-dé-

cembre 1970, pp. 24-25. (パリ・コミューン特集号)

Paul Leroy-Beaulieu は *La Revue des deux Mondes* (15 mars 1871) につきのように書いている。〈Depuis 20 ans, les provinciaux (Leroy-Beaulieu veut dire les notables, les grands possédants de province) s'étaient promis de ne plus jamais autoriser un renouvellement de 1848.〉

- 15) *Œuvres complètes*, t. XIII, pp. 411, 417 et 834.

〈処刑しようとしている〉, 〈しめころす〉という言葉が使われるのは, 1872年2月2日である。ほぼ一年前のパリ・コミューン勃発時には, これほど明確に右翼の意図ないし姿勢をとらえていなかったのではないかとも思われる。

- 16) *Ibid.*, p. 404 (5 mars 1871).

- 17) *Ibid.*, p. 410 (7 mars 1871).

- 18) *Ibid.*

- 19) Chastenet, *ouv. cité*, p. 62.

- 20) Guillemin, *ouv. cité*, pp. 133-134.

- 21) Chastenet, *ouv. cité*, p. 572 (Note du chapitre III, 15).

Jules Simon, *Le Gouvernement de M. Thiers*, Paris, 1880, t. I, p. 93.

- 22) Alain Plessis, *De la fête impériale au mur des fédérés 1852-1871 (Nouvelle histoire de la France contemporaine)*, Editions du Seuil, 1973 (Remise à jour, septembre 1976), p. 226.

- 23) *Œuvres complètes*, t. XIII, pp. 410-411 (7 mars 1871).

- 24) H. Guillemin, *L'Avènement de M. Thiers et Réflexions sur la Commune (Les Origines de la Commune IV)*, Gallimard, 1971, p. 25.

その他——

〈... elle (la bourgeoisie) ne haïssait plus l'étranger, mais elle redoutait davantage les Bellevillois.〉 (演劇批評家 Fancisque Sar-sey の言葉。Cf. J. Bruhat, J. Dautry et E. Tersen, *La Commune de 1871*, Ed. sociales, 1970, p. 75.)

〈De Belleville, de la Villette, de Montmartre, de Ménilmontant, les communistes menacent Paris et attendent le moment d'agir.〉 (Fidus, *Journal*, 10 novembre. Cf. Guillemin, *La Capitulation—1871 [Les Origines de la Commune III]*, Gallimard, 1960, p. 48.)

- 25) *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 405 (5 mars 1871).

〈Nous savions qu'une agitation toute patriotique s'était produite,

et que, même après le départ des Prussiens, Paris était resté tout frémissant de colère. De là à parler d'émeute, la pente était glissante, surtout pour des hommes qui ne voient, dans leurs rêves, le Palais-Bourbon qu'entouré d'une populace ivre, traînant des canons. Et peu à peu, la poltronnerie aidant, Bordeaux a cru que Paris brûlait.>

- 26) Bruhat, Dautry et Tersen, *ouv. cité*, pp. 103 et 384.
桂圭男『パリ・コミュニケーション』岩波新書, 1971年, pp. 103-104.
柴田三千男『パリ・コミュニケーション』中公新書, 1973年 pp. 91-92.
- 27) レーニン『国家と革命』, 全集刊行委員会訳, 大月書店, 国民文庫, 1970年, p. 74.
〈ついに発見された政治形態〉という言葉はマルクスのものである(『フランスの内乱』, 木下半治訳, 岩波文庫, 1964年, p. 101)。
- 28) *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 428 (22 mars 1871).
- 29) *Ibid.*, p. 435 (23 mars 1871).
- 30) *Ibid.*, p. 436.
- 31) 〈... les ouvriers en armes, les «Bellevillois» avec des chassepots, ces 200,000 fusils entre les mains des pauvres, ce Spartacus virtuel, cet ogre monstrueux qu'est devenue la Garde nationale.> (H. Guillemin, *La Capitulation*, p. 133.)
- 32) 彼は後に président du Conseil (1887-1888 et 1889-1890) となる。
- 33) *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 436.
- 34) *Ibid.*, p. 437 (23 mars 1871).
- 35) *Ibid.*
ゾラは Henri-Louis Tolain (Seine 選出, ex. gauche, ouvrier ciseleur) の発言に即して, つぎのようにも書いている。〈Il y a, à Versailles, assez de troupes pour garder l'Assemblée. En appelant la province à son secours, elle ne fait que braver inutilement l'émeute.> (*Ibid.*, p. 440.)
- 36) Cf. Bruhat, Dautry et Tersen, *ouv. cité*, p. 130.
- 37) 『パリ・コミュニケーション資料文書集』——マルクス『フランスの内乱』(木下半治訳), 岩波文庫, pp. 210-215参照。
- 38) *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 448.
- 39) H. Guillemin は, 選挙の数日後に22名の modéré が辞職するが, modéré がえらばれているのであるから, libre で loyale な選挙であるを書いて

いる。(L'Avènement de M. Thiers et Réflexions sur la Commune, p. 212.)

- 40) *Œuvres complètes*, t. XIII, pp. 449-450 (26 mars 1871).

Bruhat, Dautry et Tersen, *La Commune de 1871* (pp. 130-131) にはつぎのように書かれている。「反動分子の希望に反して、選挙は完全な平静のうちにおこなわれた。チエールの主張に反して、投票は完全な自由のなかでおこなわれた。ブルジョワの候補が多数あり、15人えらばれた。」

- 41) *Ibid.*, pp. 462-463 (1^{er} avril 1871).

- 42) *Ibid.*, p. 484 (12 avril 1871).

- 43) *Ibid.*, p. 467 (4 avril 1871).

- 44) *Ibid.*, p. 468 (4 avril 1871).

- 45) *Ibid.*, p. 469 (4 avril 1871).

- 46) *Ibid.*, p. 470 (4 avril 1871).

- 47) *Ibid.*, pp. 477 et 483 (8 et 11 avril 1871).

- 48) *Ibid.*, p. 483.

- 49) Cf. Guillemin, *L'Avènement de M. Thiers et Réflexions sur la Commune*, pp. 174-176 et 184.

- 50) *Ibid.*, p. 245.

- 51) *Œuvres complètes*, t. XIII, pp. 479 et 483 (10 et 11 avril 1871).

- 52) Guillemin, *ouv. cité*, p. 262.

- 53) *Ibid.*, p. 252.

「われわれはプロシア軍がなしえなかったことをしたのだ」と Georges Sand も書いている。(Cf. *Ibid.*)

- 54) *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 479.

- 55) *Ibid.*, pp. 673 et 752-754 (14 septembre et 20 décembre 1871).

- 56) *Ibid.*, pp. 930-931 (23 mars 1872).

- 57) *Ibid.*, pp. 734-736 (9 décembre 1871).

- 58) Cf. Bruhat, Dautry et Tersen, *ouv. cité*, p. 389.

- 59) *Œuvres complètes*, t. XIII, pp. 734-736 (9 décembre 1871) et p. 1002.

Ordinaire 代議士は〈Commission d'assassins〉という表現も使っていると、Charles Longuet は書いている(マルクス『フランスの内乱』木下半治訳、岩波文庫、68ページ)。

- 60) Cf. 《Notes》 par H. Mitterand sur *La République en marche*, *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 1002.

- 61) *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 773 (5 janvier 1872).
- 62) *Ibid.*, p. 671 (13 septembre 1871).
- 63) *Ibid.*, pp. 733-734.
- 64) «Zola et les communards», *Europe*, n° 468-9, avril-mai 1968, p. 17.
- 65) «Les révolutionnaires de Zola», *Les Cahiers Naturalistes*, n° 36, 1968, p. 123.
- 66) «Introduction» à *La République en marche*, *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 348.
- 67) «Vallès et Zola», *Europe*, avril-mai 1968, p. 331.
- 68) «Zola et les communards», *Europe*, avril-mai 1968, p. 17.
- 69) «Introduction» à *La République en marche*, *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 346.
- 70) «Zola et les communards», *Europe*, avril-mai 1968, p. 18.
- 71) *Ibid.*, p. 17. (*Le Sémaphore de Marseille*, 30 avril et 1^{er} mai, lettre du 25 avril, à propos du décret sur les officiers ministériels. Cf. 2 mai, lettre du 27 avril, à propos du décret sur le Mont-de-Piété.)
- 72) *Ibid.*, p. 18. (*Ibid.*, 26 mai, lettre du 22.)
- 73) *Ibid.* (*Ibid.*, 5 mai, lettre du 30 avril.)
- 74) «Introduction» à *La République en marche*, *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 346.
- 75) Cf. *Europe*, avril-mai 1968, pp. 18-19. (*Le Sémaphore de Marseille*, 25 mai, lettre du 21.)
- 76) *Ibid.*
- 77) *Ibid.*
- 78) Cf. Marcel Thomas, «Le journaliste politique», *Zola*, Hachette (Collection Génies et Réalités), 1969, p. 73.
 <Cette incapacité durable de Zola à penser, à construire la cité futur l'empêchera de devenir jamais un profond penseur politique.>
- 79) H. Guillemin, *L'Avènement de M. Thiers et Réflexions sur la Commune*, *ouv. cité*, pp. 268-269 et 286.
- 80) «Introduction» à *La République en marche*, *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 346.

「彼はコミュニケーションの指導者たちの政治計画を正確に把握しなかった。ましてや、それをみとめなかった。(……) 彼は Hôtel de Ville の宣言をまじめに考えない。彼はその立案者のうちの何人かの判断をあまり信用しな

い」と Mitterand は書いているが、〈把握しなかった〉ことと、〈みとめなかった〉こと、および、〈宣言をまじめに考えない〉ことと、〈判断を信用しない〉こととは、意味がまったくちがう。ゾラがいずれであったかをあきらかにすることが、ゾラの姿勢を正確に理解するうえで必要なのであるが、いまのところ推測以外にない。

81) *Europe*, avril-mai 1968, p. 21.

82) *L'Avènement de M. Thiers*, pp. 214-216.

83) *Ibid.*, p. 225.

84) «Introduction» à *La République en marche*, (*Œuvres complètes*, t. XIII, p. 347.

85) Mitterand, *ibid.*

Ripoll, «Zola et les communards», *Europe*, avril-mai 1968, p. 21.

Pillu «Vallès et Zola», *Europe*, avril-mai 1968, p. 331.

86) Guedj, «Les révolutionnaires de Zola», *Les Cahiers Naturalistes*, n° 36, 1968, p. 136.

87) Ripoll, *Europe*, avril-mai 1968, p. 19.

〈A l'égard de Courbet, le membre de la Commune dont il parle le plus souvent et le plus longuement, il est partagé entre l'ironie et la pitié. Il n'a pas assez d'exclamations goguenardes pour juger son rôle politique, mais, lors du procès de Courbet, il affirme: «J'ai une vive sympathie pour cette grosse bête de grand peintre», formule qui résume parfaitement son attitude à l'égard de l'artiste.〉

88) Cf. Lucien Scheler, «Emile Zola, Jules Vallès», *Europe*, n° 499-500, novembre-décembre 1970, p. 272.

89) Bruhat, Dautry et Tersen, *La Commune de 1871*, *ouv. cité*, pp. 439-440.

90) *Ibid.*, p. 427.

91) *Ibid.*, pp. 441-442.

ゾラの Rossel 評価について、Ripoll はつぎのように書いている。〈De tous les hommes qui ont exercé une responsabilité dans l'insurrection, c'est Rossel qui est considéré le plus favorablement, Zola le jugeant "bien au-dessus de tous ces coquins de la Commune".〉 (*Europe*, avril-mai 1968, p. 19.)

92) Cf. *Europe*, avril-mai 1968, p. 18.

- 93) *Ibid.*, p. 25.
 94) *Ibid.*, pp. 18-19.
 95) *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 645 (30 août 1871).
 96) Aimé Guedj, «Les révolutionnaires de Zola», *Les Cahiers Naturalistes*, n° 36, 1968, p. 129.
 97) *Œuvres complètes*, t. XIII, p. 575.

〈J'ai pensé souvent que les royalistes avaient tort d'accuser la République de ne se fonder que par la guillotine et l'incendie. (...) on verrait que les républicains sont des naïfs dans le crime, et que Paris brûlé pèse moins dans la balance de la justice éternelle que la France pillée et assassinée pendant une longue suite de siècles. (...) Pourquoi reprocher à la République les quelques nuisseaux de sang qu'elle a fait couler, lorsqu'on a derrière soi la royale mer de sang ? En somme, je ne déteste pas plus Marat que Louis XI, et j'estime que Raoul Rigault n'étaient ni plus ? ni plus cruel que certains des premiers Mérovingiens.〉

以上のようにゾラは書いているのであるが、留意すべき点は、まず第一には、新制度樹立のための流血、残忍、残酷、狂気、騒擾をゾラが積極的に容認していることである。第二には、これらが crime であると断言していること、そして、第三には、過去の歴史が犯した犯罪にくらべれば、これらの crime は非常に軽微であるとみていることである。共和国をたてるための crime は、もっと残忍で、もっと狂暴であってしかるべきだと、ゾラは主張しているようにきこえるのである。

- 98) H. Guillemin, *Présentation des Rougon-Macquart*, Gallimard, 1964, pp. 385 et 386.

P. Pillu もつぎのように書いている。〈... *la Débâcle*—postérieure à *Germinal*, proposera encore la même image caricaturale de la Commune.〉(«Vallès et Zola», *Europe*, avril-mai 1986, p. 332.)

- 99) Cf. Aimé Guedj, «Les révolutionnaires de Zola», *Les Cahiers Naturalistes*, n° 36, 1968, p. 137 et H. Guillemin, *La Présentation des Rougon-Macquart*, *ouv. cité*, p. 373.

おわりに

ゾラが政治記者として活躍した期間は非常にみじかく、事実上は、

一、二年としかいえないのであるが、人類史上きわめて画期的な事件であるパリ・コミューンに遭遇し、しかも、政治の中枢である議会の模様を取材する幸運をえて、ジャーナリストとしての才能を一挙に大きく開発し、かつ、展開することができた。ドレフュス大尉の流刑はあっても、*J'accuse!* がなければ *l'Affaire Dreyfus* は存在しえなかったであろうが、パリ・コミューン時代の議会記者生活がなければ、*J'accuse!* もまた生まれなかったであろう。いいかえれば、ゾラの議会記者生活がなければ、《ドレフュス事件》はおこりえなかったのであり、それほどこの激動時代のジャーナリスト生活は、ゾラ個人にとっても、また、歴史全般にとっても重要なものであった。

そして、その間に彼が学んだことは、彼が非難、攻撃すべきものは何であり、その正体は何であるかということであった。むろんそれまでも、彼は告発すべきものを漠然とは知っていたが、それほど明確には理解していなかった。議会記者として政治の渦中にまきこまれることによって、はじめて彼は敵対すべき対象を明白な形で認識したのである。それは右翼であり、*hobereaux* であり、王党派であり、*honnêtes gens* であった。彼はかれらにたいし、生涯、血肉化した敵意と憎悪をもって、はげしい告発と攻撃をおこなうことになるが、敵対すべきものが明確になるにつれて、当然のことながら彼は次第に共和主義を高く標榜するにいたる。共和主義にたいする彼の期待と愛着は強く、*La République* がすべてを解決し、バラ色の世界をひらいてくれるのだと考えているようにさえみえる。彼の共和主義とは具体的にどのようなものであるかをさぐるのが、わたしのつぎの課題であるが、彼のパリ・コミューンの見方にあらわれているように、世界や社会にたいする彼の見方は、多分にアナキスト的であり、また、自然主義的である。そして、このようなアナキスト的、自然主義的な傾向を彼のなかにきわだたせる契機をつくったものもまた、パリ・コミューンの動乱であったといえるのである。(完)